平成 20 年度　日本キャンプ協会ＢＵＣ対象事業

野外活動指導者のための
リスクマネジメントセミナー
報告書

社団法人日本キャンプ協会　安全管理委員会

平成２０年度リスクマネジメントセミナー報告書に寄せて

日本キャンプ協会安全管理委員会では、広くキャンプの愛好者に「安全」について考えていただくために、毎年、冊子「安全なキャンプのために」を作成し、会員や関係団体を通じて配布したり、安全標語を募集したりという啓発活動に努めています。しかし、大変残念ながら今年度も水の事故、山の事故、天候急変による事故が各地で起きてしまいました。キャンプや自然活動において「安全」で「健康」であることが、なにごとにも代えられないことがらであることを再認識させられた一年でありました。

私たちキャンプ指導者が、ケガや病気を含めた事故を未然に防ぎながら質の高いプログラムと安全なキャンプをすすめていくことには、周到な準備、事故防止対策、救急対策、および補償対策を組織としてしっかりと充実させることによってはじめて可能となります。また、参加者自身に安全教育（何が危険でどうすれば防げるかを知ること、自分の身の安全は自分で守ることなど）を徹底させることが重要視されるようになってきていますが、事故の芽を事前につみ取り、その情報を指導者間で共有することが、今できるもっとも重要な安全管理だと考えます。

日本キャンプ協会が主催するリスクマネジメントセミナーは、そういった指導者間の情報共有を目的に４年目を迎えました。今年は福岡県と大阪府を会場に主催いたしましたが、他の支部協会でも同様のセミナーを開催していただく機会が増え、指導者の間にリスクマネジメント、ハザードマネジメントの視点からキャンプを学ぶ機運が高まってきました。キャンプに参加する人や、携わる人たちの「からだの安全」と「こころの安全」を確保するだけでなく、社会的にも「キャンプは安心・安全な活動である」と認識されるために、今後もますます安全について取り組んでいく必要があります。

最後に、共に主催団体として運営をしていただいた関西テレビ青少年育成事業団、主管いただいた福岡県キャンプ協会と大阪府キャンプ協会、さまざまな面でご協力いただいた財団法人大阪府青少年活動財団、九州ブロック支部協会、近畿ブロック支部協会の各団体に心からお礼を申し上げるとともに、全国から参集し、セミナーを盛り上げていただいたキャンプ仲間に感謝いたします。

社団法人日本キャンプ協会
安全管理委員会 委員長　高見　彰

目　　次

平成２０年度リスクマネジメントセミナー報告書に寄せて 1

福岡会場報告 3
プログラム一覧 4
基調講演『気象災害と安全を考える』 5
提　　言『キャンプの安全を考える』 8
選択プログラム
A　軍手＆テント燃焼実験 10
B　キャンプ用品の安全 11
C　ＣＰＲとＡＥＤ 12
D　森に潜む危険 13
提　　言『幼児キャンプの意義と安全』 14
実　　習『リスクマネジメントエクササイズの体験』 16
募集要項 18
リスクマネジメントセミナー（福岡会場）を主管して 19

大阪会場報告 21
プログラム一覧 22
基調講演『はげしい気象変化の原因をさぐる』 23
提　　言『気象変化による野外活動の事故を検証する』 26
情報提供『安全グッズ紹介』 28
実　　習『楽しく学ぶ、キャンプの安全』 29
選択プログラム
A　キャンプカウンセリングの視点からみた心の安全 32
B　プログラム指導現場に見る安全の目 33
C　安全なキャンプのための対象者の理解とは 34
D　救急法まるごと体験！ 35
講　　演『野外活動に必要な保険の知識』 36
募集要項 38
リスクマネジメントセミナー（大阪会場）を主管して 40

アンケート結果 41

リスクマネジメントセミナー

【日　時】平成20年7月5日(土) 14:00 ～ 7月6日(日) 15:00

【会　　場】国立夜須高原青少年自然の家
〒838-0202　福岡県朝倉郡筑前町三箇山1103　TEL:0946-42-5811

【主　　催】(社)日本キャンプ協会
【主　　管】福岡県キャンプ協会
【後　　援】コールマンジャパン株式会社・株式会社ロゴスコーポレーション・株式会社ユニフレーム
【協　　力】佐賀県キャンプ協会

〔 プログラム予定 〕

■7月5日（土）

第二駐車場
13時20分：受付‥資料＆名札配布
14時：開会式・施設案内

14時25分：**★アイスブレーク**
（担当：仲西）
～14時55分

15時00分：（ラーニングルーム7）
★基調講演「気象災害と安全を考える」
九州大学大学院農学研究院★脇水　健次 **氏**
【質疑応答】
～16時45分
（進行：近藤　　記録：薛 ）

休憩・夕食（希望者：キャンプ場散策）

17時00分：（ラーニングルーム7）
★提言「キャンプの安全を考える」
大東文化大学准教授：★中村 正雄 氏
（社）日本キャンプ協会指導者養成委員会
【質疑応答】
～18時45分
（進行：大橋　　記録：吉野 ）

19時00分～
情報交換会（佐賀県＆福岡県キャンプ協会）
（ラーニングルーム）
（担当：仲西・近藤・吉野）

〔 プログラム予定 〕

■7月6日（日）

7時30分朝食
希望者：自然散策

9時：（ABCD）
★演習：選択プログラム前半45分
A：軍手＆テント燃焼実験（吉武）
B：キャンプ用品の安全（大橋）
C：CPR＆AED体験（中村）
D：森に潜む危険体験（薛）
★演習：選択プログラム後半45分
～10時45分

11時～
提言「幼児キャンプの意義と安全」
国立夜須高原少年自然の家★山口 伸一氏

12時30分：昼食
BUCはがき配布～回収

13時30分：（ラーニングルーム7）
リスクマネジメントエクササイズ体験
福岡県キャンプ協会安全管理委員会
★近藤信幸 氏

RME実施手引き配布
アンケート配布回収

15時：閉会式

諸般の事情で講習内容等変更がある場合が有りますのでご了承ください。

基調講演

気象災害と安全を考える

九州大学大学院農学研究院　准教授
脇水　健次

野外活動に天気･気象の確認は欠かせない。気象についての知識があれば致命的な危険を避けることができる場合もある。安全な野外活動のためにも、気象に興味を持っていただきたい。

１．山の天気についての知識

(１)山の天気は変化が大きく気温差も激しい

山の天気は、平地では考えられないほど変化する。尾根があったり谷があったりと地形が複雑で、気流が変化しやすい。山の天気は変わるもの、という心積もりが必要である。

(２)平地は暑くても山頂は寒い

山は気温差が激しく、標高が高くなるにしたがって気温が下がる。１００mで約０．６℃低くなり、たとえば３，０００mの山では、麓の気温が３０℃であっても山頂は１２℃になる。夏の始めや終わりには「みぞれ」が降る場合もある。また、風速１mで体感温度は１℃下がる。

(３)川の増水に注意

日本の川は流れが急で、少しの雨でも思いのほか増水するので、強い雨が降り出したら速やかに沢筋から離れること。また、ぬかるみ、滑りやすい岩場に注意する。

(４)ガス（霧やかすみ）で見えなくなったら

なるべく動かないで晴れるのを待つ。動くときはコンパスで頻繁に方向を確認しながら進むこと。

(５)雷がもっとも恐ろしい

山では、雷は横からや下からも落ちてくるし、町中のように絶対安全という逃げ場所もない。落雷の兆候があったら早めに下山すること。一番危ない場所は山頂や尾根、大岩や大木の下。山では、傘やピッケルなど棒状のものは高くかざさない。

２．天気を予測して早めの判断で危険回避

(１)天気予報

天気予報は必ずチェックして、天気がどう変わっていくかを判断しておく。気象情報はパソコン･携帯電話･ラジオなどで収集できる。気象庁や日本気象協会では一般的な地上天気図を、北海道放送(ＨＢＣ)や日本気象株式会社では、高層天気図も公開している。

(２)最新の気象情報

群馬、長野、富山、山梨、岐阜、静岡各県警が山岳情報を発信しているほか、山岳ロープウェイの会社や観光協会などが現地の天候をホームページに載せている。

(３)観天望気

天気予報ではなく、雲の形や風向きなど空の様子から天気を予測する「観天望気」もある。

＜山で利用できる言い伝え＞

ａ）雨の兆しに関する言い伝え

・太陽や月がかさをかぶると雨
・かさ雲は雨の前兆
・飛行機雲が消えないと雨の兆し
・うろこ雲は３日のうちに雨
・川の音が良く聞こえると雨
・雲が南から北に流れると雨

b）強風の兆しに関する言い伝え

・雲が東から西に速く流れると大風
・つるし雲は雨と強風の兆し

ｃ)雪に関する言い伝え

・冬の雷、大雪のもと

d）雷に関する言い伝え

・雷三日
・朝の雷に川越するな
・夜鳴る雷は長い
・雷が鳴ると梅雨が明ける

ｅ）晴天につながる言い伝え

・夕焼けは晴れ
・梅雨の夕焼け朝まで待たぬ
・霜柱が立つと晴れ
・朝霧は晴れ

３．天気図をよむ

(１)天気記号

・等圧線：地形図の等高線のような曲線。同じ高さで同じ値の気圧をつないで気圧配置を示したもの。
・高気圧：周囲より気圧が高い。高気圧が張り出すと天気が良くなる。中心から外に風が吹く。
・低気圧：周囲より気圧が低い。低気圧が来ると天気は悪くなる。周辺から中心に風が集まる。

＊寒冷低気圧：もっとも注意しないといけない。上空に寒気を伴い、雷や激しい雨が予想される。前線を伴わない。
＊温帯低気圧：おもに温帯で発生。前線（温暖・寒冷・停滞・閉塞）を伴う。等圧線がおむすび型。
＊熱帯低気圧：おもに熱帯で発生し、前線を伴わない。等圧線が同心円型。中心付近の平均風速が１７．２ｍ／ｓを超えると台風になる。
＊台　　風：暴風や激しい雨を伴う。１年に平均２６．７個発生し、１０．８個が日本に接近。２．６個が日本に上陸する。

(２)気団（同じ性質を持った空気の塊）

・揚 子 江 気 団：春・秋、中国大陸で発生し移動性高気圧になり日本にやって来る、暖かく乾いた気団（大陸性温帯気団）。
・小 笠 原 気 団：梅雨・夏、日本の南方海上で形成される暖かく湿った気団。夏になると北上し盛夏をもたらす（海洋性熱帯気団）。
・赤　道　気　団：赤道付近で形成される高温多湿の気団。台風をもたらす（海洋性熱帯気団）。
・オホーツク海気団：梅雨・夏・秋、オホーツク海や千島・カムチャッカ方面で発生する冷たく湿った気団。夏に発達すると冷夏になる（海洋性寒帯気団）。
・シ ベ リ ア 気 団：冬、シベリア付近で発生する冷たい乾いた気団（大陸性寒帯気団）。

(３)前線（「暖かい気団」と「冷たい気団」の境に描いてある）

・温暖前線：「暖かい気団」が「冷たい気団」を追いやっている。西から東に移動。北半球では、温帯低気圧の右側に　しとしと雨が長時間続く。
・寒冷前線：「冷たい気団」が「暖かい気団」を追いやっている。西から東に移動。北半球では、温帯低気圧の左側に激しい雨が短時間。雷も発生する。
・停滞前線：「冷たい気団」と「暖かい気団」がぶっかって動かない。梅雨前線秋雨前線。

４．雨を呼ぶ雲の種類

雲とは、大気中の水滴や氷の結晶が集まったもので、種類は１０種類ある。これらの雲からある程度、天気を予測することが出来る。

たとえば、ａ）広がっていた巻積雲が、高層雲に変わると、雨が降り出す前兆。

ｂ）積雲、層積雲、積乱雲は寒冷前線に伴って発生しやすいので、雨が降ったあと急に寒くなる。

ｃ）積雲は、日没とともに消えてゆくと翌日は好天になるが、雲底に黒い影が増えてくると雷雲に変わることがある。など。

巻雲

巻積雲

巻層雲

高積雲

高層雲

乱層雲

層積雲

層雲

積雲

積乱雲

・巻　　雲(け ん う ん)：ハケで掃いたような雲。すじ雲。空全体に広がると天気が崩れる兆候。まっすぐな線状なら雨のきざしで、曲がったり、乱れていれば翌日は晴れ。
・巻積雲(けんせきうん)：小さい石が並んでいるような雲。うろこ雲、いわし雲。雨が降り出す前兆。晴れたあと急に雨が降ったり、天気の変化が早い。
・巻層雲(けんそううん)：薄いベール状。うす雲。高層雲に変わると天気が崩れることが多い。
・高積雲(こうせきうん)：雲の塊が大きく丸い。ひつじ雲。低く波状だと雨が近い前兆。
・高層雲(こうそううん)：巻層雲より厚い。おぼろ雲。黒い雲の塊が混じると雨の前兆。
・乱層雲(らんそううん)：層が厚く、暗い灰色の雨雲。雨や雪を降らせる。
・層積雲(そうせきうん)：層の薄い、畑の畝のような雲。厚く黒くなっていくと下り坂の証拠。
・層　　雲(そ う う ん)：厚い霧の層のような雲。霧雲。日が高くなっても残るときは天気が崩れる。
・積　　雲(せ き う ん)：夏場に良く見られる。わた雲。雲の上部がモクモクしていれば晴れる。
・積乱雲(せきらんうん)：急激に大きくなる。入道雲。雨だけでなく、突風、雷にも要注意。

現在は、テレビ画像等で高層の雲の位置や天気図を見慣れているが、天気図が読めるようになり、天気図からある程度天気の予測ができるようになったら、ラジオの気象通報から天気図を書く練習もしていただきたい。専用の白図がなくても、低気圧の中心や前線の位置を方眼紙上に写し取れるようになれば、たとえば、「この荒天がどれくらい続くのか」といったことの予測に大いに役立つだろう。

提　言

キャンプの安全を考える

大東文化大学 スポーツ･健康科学部 准教授 ／ 社団法人日本キャンプ協会 指導者養成委員
中村 正雄

▼ 前提

○ 自然体験活動は危険と背中合わせ
○ 危険なことを危険だと知れば危険でなくなりはじめる（むのたけじ「詞集たいまつ」より）
○ 安全管理に関するコンセンサス（共通理解）を持ち、それによって得られることを明確にする

▼ 事故について知る

事故のメカニズム

事故の発生の８割　「不安全な状態（外的要因）×不安全な行為（人的要因)」
事故発生率を下げるにはこの状態と行為を理解し、双方の危険度を低くすることがポイントになる

安全でない状態（外的要因)

環境的要因（自然環境、活動環境）
物的要因（施設、道具、装備、服装）

安全でない行為（人的要因)

- 安全に対する理解と認識の不足
- 安全に対する知識の不足
- 危険に対する感受性の不足
- 安全を確保する能力の不足
- 安全を確保する能力を実行する条件の不備
- 安全に対する意識の低下、怠慢、マンネリ、サポート体制の不備
- 安全に関わる命令、指示の不徹底など

ハインリッヒの法則（１：２９：３００）

１件の重大災害（死亡・重傷）が発生する背景に、２９件の軽傷事故と３００件の「ヒヤリ・ハッと」がある。ハインリッヒによれば、この他に更に幾千件もの「不安全行動」と「不安全状態」が存在　していて、そのうち予防可能であるものは「労働災害全体の９８％を占める」こと、「不安全行動は不安全状態の約９倍の頻度で出現している」ことを約７５，０００例の分析で明らかにしている。

正常化へのバイアス

自分だけは大丈夫だと思い込もうとする心の動きで、事故などの脅威にさらされることは心理的に不快で、緊張をもたらす。この不快や緊張を和らげようとする心理的な防衛規制が働き、「自分は大丈夫」と危機的な現状を正常な方向に歪めて解釈してしまう。

このような事故のメカニズムや法則、心の動きを知っておくことがまず大切である。また、これらをもとにチェックリストを作り、項目にチェックをつけていくだけでも、自らの活動を第三者的視点からチェックすることができる。

▼ 遭遇する可能性の高い事例について学ぶ

雷

雷鳴が聞こえた時には、すでに落雷の危険域に入ってしまっている。激しい雨が降り出してから避難するのは完全に逃げ遅れ。身につけた金属類をはずしても安全ではない。人体そのものが雷の電流を通しやすい。木のそばへの避難は自殺行為である。

<質問> 避難が難しい場所にいる（特に水辺）ときはどうすればよいか。

⇒ 一刻も早く安全な場所に移動することが大切。身を低くし、固まらず散らばって避難する。

<質問> 杉の木立の中にいる場合はどのようにすればよいか。

⇒ 木の高さにもよるが、全ての木から４m以上離れておくことがよいと思われる。そもそも、雷が起きそうなときに避難できない場所にいるようなプログラムは組まないことが大切。

ハチ

ハチは黒いものや甘い匂い、香水や整髪料などに向かって攻撃をしかけてくる。また、ハチは払う動作に敏感なため、ハチがいたら静かに逃げる・去ることが一番大切。
ハチに刺されたらポイズンリムーバーで針を抜く、または水をかけて流す（ハチの毒は水に溶けやすい）。
アナフィラキシーショックは、誰にでも起こる可能性がある。毒の量やその人の体質によっては、ハチに刺されることが初めてでも死に至る場合もあるので要注意。

熱中症

１９７５－２００５年に起きた学校管理下の熱中症死亡事故の男女比は男１３６：女１０である。スポーツ別に見ると、野球が最も多く、屋外ではラグビー、サッカー、屋内では柔道、剣道で多く発生している。練習内容では持久走やダッシュの繰り返しなど継続するランニングで多発している。

▼事前（計画段階で）のリスクチェック

- テーマ、対象者、活動プログラムの設定
- 組織、指導者（資格基準を含む）、場所（施設）、備品、輸送手段の決定
- 実地踏査（毎年同じ場所なので省略、というのはよくない）

▼ 安全管理の要点

○ 想定できる危険を予見し、その回避のための対策を講じる
○ 万が一の際の対応を準備する（アウトドア特有の条件を踏まえて）
○ 参加者に自分の安全は自分で守ることの重要性を知らせる

▼まとめ

○ 活動内容やその程度、参加者の危険予見・回避能力によって対策は異なる
○ 安全に実施できるシステムづくりが野外活動の効果を高めることにつながる

選択プログラム A

軍手＆テント燃焼実験

福岡県キャンプ協会
吉武　忠雄

軍手の燃焼

野外活動では、作業をするとき軍手を使用することが多い。しかし、全ての活動に軍手が万能なわけではない。
燃焼した棒を押し当てたときにどうなるのか、いくつかの種類の軍手で試したものを見ながら、軍手の熱伝導性、耐熱性、燃焼性など軍手の性質を学び、活動に合った軍手を使用していきたい。

ポリエステルはすぐに溶け出す。またポリエステル混紡もポリエステルよりは時間がかかるが、溶け出す。この２種類はキャンプ（野外調理）にはふさわしくない。
一方、純綿の軍手は同じ時間でも焦げ跡が残るだけで、溶け出さない。野外料理には「純綿（綿１００％）」の軍手がふさわしい。

((写真左から))
ポリエステル／ポリエステル混紡／綿１００％

テントの燃焼

＜新聞紙トーチの作成（朝刊１回分で出来る新聞紙トーチ）＞

①新聞紙を５枚と３枚に分ける。
②５枚の新聞紙を縦長に丸めて棒となる部分を作る。しっかりと巻き、緩まないように置いておく。
③３枚の新聞紙を広げて、対角線上に折り、丸めていく。
④長い棒状にし、全体を握りつぶしてやわらかくする。
⑤先ほど作った②の棒の先端から③をねじりながら巻きつけ、末端は巻いてきた部分にねじりこみ、止める。
⑥最後に、両手で③を巻きつけた先端部分を絞りこみ、形を整える。

＜新聞紙トーチを使ってテントの燃焼実験＞
　新聞紙トーチに火をつけ、テントに着火してみる。

((結果))
燃焼しない。火を当てた部分は丸く溶けてガスが出るが、火はつかず移らない。
昔のテントはよく燃えたが、今のテントは燃えない。

7月6日(日)　9:00～9:45 ・ 10:00～10:45

選択プログラム B

キャンプ用品の安全

福岡県キャンプ協会 会長 ／ 社団法人日本キャンプ協会 安全管理委員
大橋 光雄

1 革手袋の熱伝導性を体験

野外調理のときに使用するのに最もふさわしいとされる革手袋を着用し､ダッチオーブンで３０分燃焼させた石を握って熱の伝わり方を体験する。

((結果))

握って数秒で煙がでてくる。また、数秒しか持てないほど熱伝導は早い。

熱は伝わるが手袋が溶けることはないので、他の手袋を使用するよりは、安全といえる。

2 鍋の違い

２つの種類の鍋を用意し、どのように熱が伝わっているのか、水の沸き方を見て、確認する。

・ステンレス製　→熱伝導が一定ではない。（例：ご飯を炊くのにはふさわしくない。）

・アルミ製　→熱が対流する。(例：ご飯が美味しく炊ける。)

☆息抜きクイズ☆　～ダッチオーブンの熱の伝わり方～

次の野菜のうち、最も早く熱が通るものはどれか。

①じゃがいも　②さつまいも　③にんじん

Ａ．さつまいも

ダッチオーブンは、土鍋と同じで熱が冷めにくいため、強火で調理する場合は、余熱時間を差し引いて調理する。

3 カップの違い

ステンレス、チタン、アルミニウム、プラスチック、紙のカップを用意し、放熱実験をおこなう。それぞれのカップにお湯をいれ、持ったとき一番熱が伝わりやすいカップを確認する。

((結果))

アルミニウムとプラスチック製のカップが一番熱を伝えやすかった。

7月6日(日)　9:00～9:45 ・ 10:00～10:45

選択プログラム C

ＣＰＲとＡＥＤ

大東文化大学　スポーツ･健康科学部 准教授 ／ 社団法人日本キャンプ協会 指導者養成委員
中村　正雄

ＣＰＲとは･･･心肺停止状態になった患者に人工呼吸と胸骨圧迫をおこなうことを言う。人工呼吸をおこなうのに抵抗があったり、うまく呼吸が入らない場合は胸骨圧迫だけでも救命率は大幅にアップすると言われている。

ＡＥＤとは･･･除細動(心拍のリズムを異常にする細動を取り除くこと)の必要性をチェックできる。ＡＥＤは電気ショックの要･不要を知らせ、必要であれば患者の胸部に貼られたパッドから除細動をおこなう。

＜映像を見ながら、ＣＰＲとＡＥＤの使用方法について学ぶ＞

・ＣＰＲは脳に酸素のある血液を送り込む役目があり、ＡＥＤは一時的に細動を止め心臓のリズムを整える役目がある。
・突然の心停止の原因として最も多いのは心室細動であり、早期ＣＰＲと早期ＡＥＤを実施することによって蘇生率を飛躍的に向上させることができる。
・ＡＥＤの効果－米国では市民が利用できるＡＥＤを設置し、有効に活用させることで蘇生率を５０％にまで向上させたケースも出ている。

＜ＣＰＲとＡＥＤの体験＞

・救助者役、１１９番通報者役、ＡＥＤ持参者役の３役に分かれ、全ての役割を交代しながら全員が体験をする。
・心臓マッサージの圧迫するポジション、圧迫の仕方、年齢や体格に合わせた圧迫の深さ、タイミングなどの細かい説明を受ける。

＜余談＞

カジノで実際に起こったＡＥＤ使用による救助の映像を見る。
人が倒れてから通報まで１５秒､除細動開始(ＡＥＤ使用)まで３分という早さが素晴らしい！
カジノの職員の役割がはっきりしているため､スムーズな救助活動をおこなうことが可能である。

ある日突然、目の前で人が倒れ、自分が救助しなければならない時が来るかもしれない。
その時、ＣＰＲやＡＥＤをおこなっても患者が回復しない場合もあるだろう。
しかし、「回復しなかったのは自分の責任だ」と責めたり、そうなることを恐れて救助しなかったりせず、「助かるかもしれない！」という希望を持ってＣＰＲとＡＥＤをおこなってもらいたい。

選択プログラム D

森に潜む危険

九州大学大学院農学研究院　准教授　／　福岡県キャンプ協会
薛　孝夫

所内を散策しながら、身近にある危険な植物を見てまわる。

１．かぶれる植物

かぶれは『皮膚炎』の俗称で、さまざまな物質に対して皮膚がアレルギー反応を示し、アレルギー皮膚炎となる。アレルギー体質の人が、ある一定以上のアレルゲン（原因物質）と接触することで発生する。日常的に触れていても、免疫システムが過剰反応の必要を感じなければアレルギーは起きない。

↑ヤマハゼ

<観察した植物>

◯ヤマハゼ
◯ハゼ
◯エゴノキ(実)
◯イヌビワ
◯ヌルデ

↓エゴノキ

↓ヌルデ

２．食べると危ない有毒植物

チョウセンアサガオやアジサイの葉を食用と勘違いして中毒になる事故が起きている。根や葉だけで植物の種類を見分けることは難しいことを知り、食べられるかわからない植物は絶対に食べないようにする。また、中途半端な知識だけで、他の人に「食べられる」などと教えないようにする。万が一、有害な植物を食した場合は、早急に医師の診断を受けるようにする。

３．危険な動物

森の中には、マムシ、ヤマガカシの他に、ハチ、チャドクガなど、危険な昆虫たちもいる。中でもスズメバチによる被害が多い。森の中での活動（ハイキングなど）をおこなう際は、こういった危険な昆虫たちの攻撃を受けないための予防、遭遇してしまった時の対処法、攻撃を受けたときの対処法など、最低限の知識として知っておく必要がある。

４．動植物によるかぶれ･虫さされの薬

市販薬の効果にも、近年、進歩が見られる。ひとえに虫さされと言っても、さまざまな症状があるので、虫によって薬も使い分ける必要がある。
森に入る際、虫除けを使用することは多いと思うが、虫除けはむやみにつけず、必要最小限に使用することが望ましい。また、必要が無くなったら洗い流したほうが人体に与える影響は少ない。

提　言

幼児キャンプの意義と安全

国立夜須高原青少年自然の家　企画指導専門職
山口　伸一

昨年度から国立夜須高原青少年自然の家で企画事業としておこなっている小学校低学年(１～３年生)キャンプ「夜須高原キッズレンジャー」を事例に、幼児キャンプの意義と安全管理について学んだ。

幼児キャンプの意義

○中央教育審議会答申
「基本的生活習慣の欠如」「食生活の乱れ」「自制心や規範意識の希薄化」「運動能力の低下」「コミュニケーション能力の低下」「小学校にうまく対応できない」等の問題点があげられ、それらを「豊かな体験活動」を通して身につけることが必要であるとしている。

○幼稚園教育要領
「自然や生き物とのかかわり、道徳性や規範意識、思考力、判断力の芽生えを養う」という目的が示されている。このことから、この目的にそった幼児キャンプが必要となる。

○社会のニーズ
自然体験活動の低年齢化が進んでおり、国でも、幼少期から体験活動をさせる必要性を感じていることから、夜須高原青少年自然の家でも幼児キャンプの企画事業をおこなった。募集を開始してみると６０名の募集に対して５００名近い応募があり、社会のニーズを実感できる。

幼児キャンプの安全管理【企画事業「キッズレンジャー」から】

○活動別、注意すべき点
・森に入るときは･･･人数把握、天候、危険な動植物、熱中症、服装、子どもの様子の観察など
・水辺の活動では･･･人物把握、上流の天候、周りの様子、子どもの場所および様子の観察など
・野外炊飯では･････刃物等の扱い、火、整理整頓など
・夜の活動では･････人物把握、服装、準備物の確認、子どもの様子の確認また安心させることなど

○実際に起こった事例
・森に入るときは･･･子どもは、何をするか分からない。事前にチェックはしていたが、目を離した隙に、活動場所から離れ、ハゼの木に登って遊んでいた。
・水辺の活動では･･･活動が楽しすぎて、唇が真っ青になっていたことに気づいていない。
グループの子どもが他のグループに入ってしまい、スタッフが「～君」と大きな声を出し活動がストップした。
・野外炊飯では･････子どもたちは、係を決めていてもすぐに火のそばに集まってしまい、スタッフたちは、子どもたちの把握がうまくできなかった。
・夜の活動では･････暗いために、スタッフが自分のグループの子どもがどこに行ってしまったか分か

らなくなってしまった。結局、大きな声を出して、自分のグループの子どもを捜さなくてはならなくなった。

質疑応答

○事業について･･･１泊２日を３回、３回目は保護者も一緒に参加。参加費は１回２，３００円程度。

○スタッフの数･･･２０名（参加者は子どもだけで６０名、
１班６名の１０グループとして、各グループにスタッフが２名ずつつく）

○ミーティングの回数･･･１週間前に１回と、初日の開始前２時間の２回。キャンプ実施中は毎晩ミーティング。事前ミーティングは、充分な回数おこなったとは言えない。

○幼児のキャンプの必要性･･･スライドでも紹介したように、確かに、小学校高学年のキャンプも大切である。しかし、現代の子どもたちの実態、社会のニーズを見ても、早い段階から自然体験活動をすることで、子どもたちが抱える課題を解決することが大切であると考えている。

グループワーク【危険な生物に遭遇したときの対処方について学ぶ】

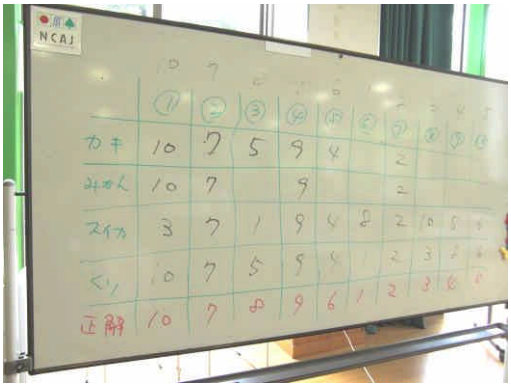
※「リスクマネジメント」講習会ということで、今まで学んだことを生かしたちょっとした体験活動をおこなう。

○準備するもの･･･課題とルールを記載した用紙、対処方法が書かれた１０枚のカード（情報紙）
対象となる危険な生物が書かれた回答用紙、ふりかえり用紙、正解を書いた用紙
筆記用具

○事前に･･･アイスブレイクを兼ねて簡単なゲームをおこない、４、５人のグループになるようグループ分けをする。今回は、「好きな果物は何？」ということでグループ分けをおこない、分かれたあと、その果物が示す性格判断を知らせ、和やかな雰囲気にしてからグループワークをおこなった。

○進め方

1. 個人で考え、個人決定の枠に回答を記入していく。
2. コンセンサスによる集団決定をする際の留意点を確認。
3. グループで話し合い、グループの意見としてまとめる。
4. 各グループの回答を全体でシェアし、正解の発表。
5. 個人・グループの順でふりかえり。
6. ふりかえりで話し合ったことを、全体でシェアする。



実　習

リスクマネジメントエクササイズ（ＲＭＥ）体験

福岡県キャンプ協会
近藤　信幸

リスクマネジメントエクササイズ（以下ＲＭＥ）とは何か

▽目的　野外活動のいろいろな場面における事故予防、安全対策、危機対応を自らの問題として考え、さまざまな意見や価値観と危険回避の知識を、参加者同士で共有し、個々の安全意識を高める。

▽内容　参加者が少人数のグループに分かれ、話し合いを進める**参加型**の学習であり、話し合いを通していろいろな体験をする**体験型**の学習である。
キャンプ全体の指導者・管理者であるキャンプ長・施設長を対象とした「事前の予防対策」、子どもの生活やプログラムの指導を行うリーダー・インストラクターを対象とした「事故発生時の対応」、キャンプに参加する子どもたち・キャンパーを対象とした「危険回避」の３タイプの問題がある。

▽学習効果　参加者はさまざまな問題を共通の問題として考え、意見交換し、コンセンサスを求める過程で、自分とは異なる意見や価値観の存在に気づくことが出来る。また、経験の深さや考え方の異なる人との話し合いの中から、多くの知識が得られ、より幅広い安全管理能力を身につけることが出来る。

ＲＭＥのすすめ方とルール

①５人程度（奇数人数が望ましい）でグループにわかれ、向かい合わせになるように座る。
②進行役が問題を読み上げ、まずは個人としての意見を合図とともに表示する。
③グループ内で一番多かった回答を表示した者は「多数意見チップ」を、少ない回答を表示した者は「少数意見チップ」を受け取る。
④なぜその回答を選んだのか、グループ内で話し合う。選択理由は全員が話すこと。
⑤話し合いを通して、グループ内で意見を１つにまとめるように努力する。
⑥途中、もう一度個人としての意見を表示する。その時、回答を最初に表示した時から変更した者は「変心チップ」を受け取る。また、変心チップを受け取った者は、回答を変更するきっかけとなった者に「説得チップ」を与える。
⑦グループ内で意見がまとまらない場合は、もう一度話し合う。
⑧２０分前後で、各グループの経過と結果を全体に発表し、他のグループの判断や考え方を知る。
⑨上記②～⑧を数問題くり返す。進行役は全問題終了後、個人で持っているチップの色や数から考えられる特性や、参加者に対する感想などをコメントし、まとめる。

ＲＭＥの体験

５人組×３グループ、７人組×１グループにわかれる。話し合いやすいようにテーブルを向かい合わせにして座り、以下の問題を体験する。

▽問題　　肝試し中にショック症状

ある子ども会のキャンプで夜に肝試しをした。
約３００ｍの細い山の道を２人ずつで歩いていく途中に、スタッフがいろんなお化け役になり、皆を驚かすことになっていた。
半分ほどが終ったところで１人の子どもがある「お化け」に驚き、ショック状態となり、その場に座り込んでしまった。幸い症状は軽く、スタッフが休養室へ運び込んで大事には至らなかったが、その後のプログラムをあなたならどうしますか？

① すぐに肝試しのプログラムを中止する。
② 軽度のショック症状だったので、そのことを全員に伝え、注意を促してプログラムを続行する。
③ 軽度のショック症状だったので、そのことは特に全員には話さず、原因となったお化けだけは中止して、プログラムを続行する。

＜参加者の様子＞

・ 話し合いを進めていくにあたって、グループ内の進行役が「人の意見を聞かない」、「自分の意見を中心に進めていく」など中立な立場で進行できておらず、グループ内の話し合いがうまく進めていけない班もあった。
・ まず自分の意見を表示し、自分がどう考えているかを他の参加者に説明することで、自分の考えを改めて見直すことが出来ているようだった。
・ 自分が考えもしない意見が他の参加者から述べられ、新しい意見を自分の中に取り込むチャンスとなった。

＜まとめ＞

・ 全体に話し合いの時間が少なかった。とことんというところまで話し合いができていなかった。
・ 全体の進行役は、グループ内の進行役がうまく話し合いを進められているかを見て周りながら、グループ内の進行が難しいようなグループがあれば、少し介入して話し合いを進めていくと良い。
・ 全体発表により、自分たちのグループでは出なかった新しい考え方を知ることができる。
・ ＲＭＥでは、いかに色々な人から様々な意見を聞きだし、それを自分のものできるかによって、学習の効果は異なってくる。
・ 問題を通して、参加者が体験したことを疑似体験できる。事故予防は、事前にどれだけの想定を出来るかが大きな要である。ＲＭＥで「事前に出来る限りの想定」パターンを多く身につけてほしい。

＜今後に向けて・時間配分の反省点＞

・ ＲＭＥの説明は１５分、進め方とルール説明に１０分(班わり、役割分担等)
・ １ステップの討議１５分でチップの移動。再討議でグループ内のまとめで２５分。
・ 全体発表の時間を１グループ３～５分で行い、集約する。
・ 全体時間としては１時間４０分から２時間弱ぐらいが必要。

募集要項

（社）日本キャンプ協会：主催事業　ご案内　平成20年度　（社）日本キャンプ協会BUC対象事業

野外活動指導者のための・・・・・・・・・・・・・・・・【実施要綱】

リスクマネジメントセミナー

■趣旨：野外活動指導者は安全に活動することが何よりも優先されます。年に1回、リスク（安全）について考えてみましょう。　指導者の皆さんの安全資質の向上に必要な実践やリスクマネジメントに必要なアクションプランづくりを実践してみましょう。

　この事業は、仲間の活動を知ることにより、より多くのキャンプに触れ合う機会や研究の場とするとともに、講習会をとおして、リスクマネジメントに対する認識を高めていただくことをねらいとしています。

実行委員長福岡県キャンプ協会会長：大橋 光雄

【日時】平成20年7月5日（土）14:00 ～ 7月6日（日）15:00

●会場：国立夜須高原青少年自然の家 【1泊2日】

基調講演「気象災害と安全を考える」

★九州大学大学院農学研究院：脇水 健次 氏

演習：選択プログラム

A：テントの燃焼実験

B：キャンプ用品の安全

C：CPR&AED体験

D：森に潜む危険体験

提言：「幼児キャンプの意義と安全」
講演：山口 伸一 氏
国立夜須高原少年自然の家　専門職員

RME「リスクマネージメントエクササイズ」体験
実習：近藤 信幸 氏
福岡県キャンプ協会　安全管理委員会委員長

提言：「キャンプの安全を考える」
講演：中村 正雄 氏
大東文化大学　准教授

【受講料】1泊2日＝6,000円（資料・食事・記念品代・保険その他）

■定員：60名　　締め切り6月末日　　※注意：6月27日からキャンセル料50%になります。

■対象：自然体験活動、野外活動、野外教育関係のディレクター・リーダー及び野外活動施設の管理者

【主 催】（社）日本キャンプ協会
【主 管】福岡県キャンプ協会
【後 援】コールマンジャパン株式会社・株式会社ロゴスコーポレーション・株式会社ユニフレーム
【協 力】佐賀県キャンプ協会

申し込み先：福岡県キャンプ協会事務局「リスクマネージメントセミナー」係
〒813-0042福岡市東区舞松原2-5-16
fukuoka@camping.or.jp　　TEL＆FAX　092-663-3372
①氏名（フリガナ）　②性別　③年齢　④連絡先　⑤会員番号

（社）日本キャンプ協会のBUC事業となります。自己研鑽と仲間づくりの空間として、是非ご参加ください。

Brush up Communication（事業番号：08015）

リスクマネジメントセミナー(福岡)を主管して

大阪以西では初めての開催となるリスクマネジメントセミナーを主管させていただきました。日本キャンプ協会安全管理委員会のご支援を得て、無事にセミナーを終えることができましたこと、関係者の皆様に感謝申し上げます。

平成１７年度から大阪で開催されてきたリスクマネジメントセミナーに、平成１８年度、１９年度と、福岡県の会員も参加させていただいて、九州でもこのような魅力的で有意義なセミナーが開催できればという思いが高まっていました。平成２０年３月に、福岡県キャンプ協会主催の「リスクマネジメント講習会」という形で試行しましたところ、県外からの参加者も含めて４０名が集まり、このようなセミナーへのニーズを確認することができました。

「リスクマネジメントセミナー九州会場」を主管するにあたって、まず地域のキャンプ指導者にリスクマネジメントの必要性を感じてもらうことが大事だと考え、特定のテーマを設けるのはなく、基本的な事項をなるべく広く網羅するよう努めました。国立夜須高原青少年自然の家を会場とした１泊２日のセミナーとし、全体的なプログラム構成は、主に大阪でのセミナーにならいました。

九州大学の脇水健次先生による「気象災害と安全を考える」と題した基調講演と、大東文化大学の中村正雄先生による「キャンプの安全を考える」の講義は、それぞれ、詳細な資料を示していただき、多くの受講者にとって得るものの多い講演となりました。たとえば中村先生は「落雷実験と落雷事故の回避」をテーマにしたビデオを上映され、雷はおおむね高いものに落ちやすいが、条件によっては高さには無関係に落ちること、金属製品を身につけているかどうかは関係ないことなどを学びました。

２日目は、選択プログラムの演習と、夜須高原青少年自然の家の山口伸一氏による「幼児キャンプの意義と安全」と題した講義が行われました。選択プログラムの「軍手とテントの燃焼実験およびキャンプ用品の安全」と「森に潜む危険体験」は、青少年自然の家での開催という利点を生かして野外で行いましたので、危険回避についての心構えや知識を実体験の中で培っていただけたものと思います。

恒例となったＲＭＥ（リスクマネジメントエクササイズ）も行われ、４班に分かれてキャンプの安全について意見交換をしました。ＲＭＥは、グループの顔ぶれが違えば交わされる話題も異なり、リスク回避に関して学べるというだけではなく、コミュニケーションの機会を作るツールとしても役立つものだと感じました。

リスクマネジメントは、一度話を聞けばできるというものではありません。これからも定期的にこのようなセミナーを開催して、キャンプ指導者が学び合い、安全管理についての認識を新たにする場として生かしていきたいと思います。参加者の皆様、ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

福岡県キャンプ協会　会長　大橋光雄

野外活動指導者のための

リスクマネジメントセミナー

関西会場　報告

＜日　程＞　平成２１年 １月 ３１日（土）
２月　 １日（日）

＜会　場＞　大阪府立青少年会館

＜主　催＞　社団法人 日本キャンプ協会
財団法人 関西テレビ青少年育成事業団

＜主　管＞　大阪府キャンプ協会

＜協　力＞　近畿ブロック支部協会
財団法人 大阪府青少年活動財団

1月　31日（土）　1日目		会　場
13：00	受　付	大阪府立 青少年会館 ２Ｆ 第６会議室
13：30	開会式・主催者挨拶・オリエンテーション	
13：45	基調講演　「はげしい気象変化の原因をさぐる」 関西テレビ「ANCHOR」お天気キャスター　片平　敦 氏	
15：20	提　言　「気象変化による野外活動の事故を検証する」 財団法人 関西テレビ青少年育成事業団　顧問　畠中　彬 氏	
16：40	情報提供　「野外活動の安全グッズ紹介」 社団法人 日本キャンプ協会　安全管理委員　大橋　光雄 氏	２Ｆ 特別会議室
17：30	実　習　「楽しく学ぶ、キャンプの安全 ～ＲＭＥ（リスクマネジメントエクササイズ）体験～」 社団法人 日本キャンプ協会　安全管理委員会	２Ｆ ①第６会議室 ②第３会議室
19：00	夕食・交流会	２Ｆ 特別会議室

2月　1日（日）　2日目		会　場
9：00	受　付	２Ｆ 第６会議室
9：15 ～ 10：35	演習　選択プログラム（８０分×２回） Ａ「キャンプカウンセリングの視点からみた心の安全」 大阪人間科学大学　准教授　森園　忠勝 氏	１Ｆ第１ｸﾞﾙｰﾌﾟ室
・ 10：40 ～ 12：00	Ｂ「プログラム指導現場に見る安全の目」 東大阪市野外活動センター自由の森なるかわ　所長　奥　義博 氏	２Ｆ 第５会議室
	Ｃ「安全なキャンプのための対象者の理解とは」 財団法人 大阪府青少年活動財団 企画推進室 課長　今井　正裕 氏	２Ｆ 第１会議室
	Ｄ「救急法まるごと体験！～応急処置からＡＥＤまで～」 神戸ＹＭＣＡ　主任主事　宗行　孝之介 氏	２Ｆ 第３会議室
12：00	昼　食	２Ｆ 特別会議室
13：00	講　演　「野外活動に必要な保険の知識」 株式会社ワイサービス　浜崎　正三 氏	２Ｆ 第６会議室
14：30	閉会式	

基調講演

はげしい気象変化の原因をさぐる

関西テレビ「ANCHOR」お天気キャスター ／ 気象予報士
片平　敦

気象の変化による野外活動の事故が増えてきている今、なぜこんなに気象の変化がはげしいのか、どこに原因があるのか。究極の危険回避と言える天気予報を学び、野外活動に備えておきたい。

気象災害による犠牲者数　（詳細な数字は気象庁のホームページに記載）
ハード面（川・海）の整備が進み、犠牲者数は減少してきた。１９９１年以降はほぼ横ばいとなっているが、３０年前と比べると半数になっている。しかし、犠牲者数が減っていても、台風の数は増えている。ハード面の整備だけでは問題は解消されないので、気象情報をうまく利用して自分とまわりの人の命を守れるようにしていくことで、犠牲者数を減らしていけるのではないだろうか。
気象災害による犠牲者は減り続けているわけではない！

気象情報で守れる命
１９９９年８月玄倉川増水事故が起きた日、天気予報では大雨が降ると予報されていた。またその場所は危ないと警告されていたのに、中州でキャンプを続けてしまった家族がいた。その結果、中洲に取り残された人が亡くなるという大きな事故になった。
その事故が起きたとき、お天気キャスターというのは、洗濯物を雨から防ぐような簡単なリスクマネジメントだけでなく、人の命を守る仕事なのだと感じた。正しく気象情報を利用していれば、救えたかもしれない命がある。気象情報は病気でいえば予防にあたるものである。

１．雨の観測方法　　～「１時間に○○ミリ」の「ミリ」ってなに？～
ミリとはミリメートルのこと。全国に１，３００ヶ所設置され、気温･太陽光の量・風の強さ･雨量を計測するアメダスによって、雨量が何ミリメートルの深さになるのかを測ったもの。６畳間のスペースで考えると、１０ミリは１斗缶６本弱、５０ミリはドラム缶２本、８０ミリはワゴン車１台分の雨が降り注ぐことになる。この雨水が低地へと一度に流れ込んでいくため、鉄砲水が発生する。一度、防災館などで８０ミリの雨を体験しておくとよい。

２．大阪で発生している大雨の現状

頻発する大雨災害
気象庁の観測における日本の最大１時間降水量記録を参考にすると、ランキングは７月～８月が多いが、夏ではないのに大雨という記録もある。大雨は、夏以外にも起きるということを覚えておいてほしい。（１９９９年１０月千葉香取で１５３ミリ、１９８８年４月沖縄多良間で１５２ミリなど）

大阪府内で近年発生した大雨
２０００年を過ぎたあたりから、１００ミリ越えの雨が増えている。気象学的に言えば、都市化や温暖化が原因だと言われている。大阪府内ではここ５年で新記録を更新したものが多い。
堺アメダス(大仙公園内)２００８年９月／９３．５ミリを観測。駅が浸水するなどの被害があった

が、翌日様子を見に行くと、よく晴れ、前日に水害が起きたとは思えないほどいつもと変わらない様子だった。また、その日、大阪市内はほとんど雨が降っておらず、雨が降ったのは大仙公園内のみだった。豪雨は場所を選ばないことがよくわかる。

「大気の状態が不安定」って？

天気図の基礎知識として簡単に言えば、高気圧が晴れ、低気圧が雨・くもり、暖かい空気と冷たい空気が流れ込んで空気がケンカして雲が出来ている状態が前線、となるので、前線と低気圧がないかどうかを気にしておけばよい。しかし、天気図上では問題なくても、山に登ってみると予想外な状況になっていることがある。

通常の天気図ではわからないが、専門家が見る上空約５，７００ｍの天気図で気温がものすごく低いとき、上空に寒気が入ってくると雷・雷雨が発生しやすくなるため、この状態のときを「上空の寒気の影響で大気の状態が不安定です」と気象予報士は説明している。

地上と上空約５，７００ｍとの気温差が４０℃前後のときは警戒が必要。予報で「上空の寒気」「不安定」「雷雨」「急な雨」という表現を使っていたら要注意しておくこと。

気象予報には限界がある。野外活動をするみなさんが自分の目で直接現地の空を確認し、危険を察知することが大切。警報の有無に限らず、自分の考えで動いてほしい。

３．気象台が発表する防災情報・天気予報の利用方法

警報・注意報

(警報)　大雨、洪水、暴風、高波、大雪、波浪、暴風雨

(注意報)大雨、大雪、濃霧、波浪、風雪、雷、着雪、高潮、なだれ、洪水、着水、乾燥、強風、霜、融雪、低温

警報とは、重大な災害（人命に関わるような大きな災害が予想された場合）の起こるおそれのある旨を警告しておこなう予報のことである。警報が発表されているかは、携帯電話やインターネットで気象庁、ウェザーニュースなどで調べることが出来る。警報の発表では、どういう現象が起きるのかが簡潔に書いてあるので、自分が今いる地域の警報・注意報がどうなっているのか、文章で見てみるとよい。

土砂災害警報発令

土砂災害発生の危険性が高まった場合に発表する。警報と同等の扱いとなる。来年の夏ごろには、市町村ごとに出すことになる。

竜巻注意報・雷注意報

竜巻注意情報が出たら、空模様の急変に注意しよう。

雷注意報が出ているときは、空の様子をしっかり見て、できれば野外の活動は避けてほしい。入道雲は山のほうが早く発生する。山では午前中から夕立が起こることもあるので、朝であっても危ないということを覚えておいてほしい。自分とまわりの人の命がかかっているので、警報・注意報を甘く見ないでほしい。

４．こんな雲には要注意！

「自分の身は自分で守る」のが基本

気象庁の公式文書で、「全てを予見することが出来ない、わからないこともある」という内容が公言された。事実、突然の雷雨の予測は技術的な限界がある。天気予報と市民の方がそれぞれ出来ることをおこない、気象災害・犠牲者ゼロを目指していきたい。

そのために、気象の予備知識をしっかりと持ち、その上で天気予報の情報をうまく活用しよう。

積乱雲（入道雲）

１０ｋｍ圏内であれば、雷が落ちる可能性があるため危ない。積乱雲の下に入ってしまうと、黒（灰・紺）の色でモコモコではなくなる。雷を伴った雲が近づいている前兆現象としては、ヒヤッとした風が吹く、雷の音が聞こえる、昼間なのに真っ暗、など。こんな時は要注意！
前兆現象が起きても、危ないと感じない人も多い。誰かが何かを言わないと動かない受身の姿勢を持ちやすいということを、指導者の立場として理解しておくことも必要である。

５．まとめ

気象でのリスクマネジメントに大切なことは･･･

①気象情報の確認、十分な注意を！

②空模様に十分な注意！

携帯電話などの情報も有効的に使い、ひとつの情報に依存するのではなく、総合的に判断し、日頃からリスクを把握し決断するようにしてほしい。自分の身は自分で守る心構えを！

正常性バイアス・多数派同調バイアス　※バイアスとは、偏見、思い込み、先入観

今、地震が起こったら何をする？と質問すると、たいがいの人は“自分は無事だ”という前提で回答する。地震が起こっても自分はケガをしない、死なない、と考えてしまう（＝正常性バイアス）からだ。また、韓国の地下鉄火災が起きたとき、車両内の乗客は誰も逃げようとしなかった。結果、多数の犠牲者がでたが、これも「誰も逃げていないしなぁ」という多数派同調バイアスによって起こった事故だと言える。
「自分だけは大丈夫！」「誰も逃げていないから大丈夫！」と無意識に考えてしまう、それが危険であると認識し、自分の判断で自分の身を守っていってほしい。

質疑応答

Q．子どもが気象に関してあまり興味を持っていないのですが、どうしたら興味を持ちますか？

→　天気はイメージしにくいので、とにかく外へ出て自分たちの経験を結びつけ、例えをうまく持ち出して説明してみてはどうでしょうか。天気の基本は観測、観測･･･の継続です。また、座学だけでなく、１時間入道雲のスケッチをするなどし、その変化を理解するような形でも興味を持ちやすくなるのではないでしょうか。

Q．犠牲者数のグラフで、１０年ごとに犠牲者数が急増していたのですが、それはなぜですか？

→　色々な動機に結びつけて研究をおこなっている人はいるが、その変動の理由は正直わかりません。ただ、天気だけでなくいろいろなことが関係しているのではないか、とは個人的に思っています。

Q．雷に関して、金属を身につけているかどうかは関係ありますか？

→　金属は関係ありません。雷は背の高いものが一番好きなので、高いものにまず落ち、それからそばにいる電気を通しやすいものを探してジグザグと落ちていきます。
車の中、建物の中が一番安全です。木造の建物は少し危険です。野外活動をする際は、事前に雷が落ちそうならここへ逃げようと考えておいてください。

提　言

気象変化による野外活動の事故を検証する

財団法人関西テレビ青少年育成事業団　顧問 ／ 社団法人日本キャンプ協会 安全管理副委員長
畠中　彬

２００８年に発生した事故事例

【河川の増水による事故】

７月：神戸市・都賀川での増水事故
　　－　１０分間で１３４ｃｍの増水。２つの川が合流したことで短時間に増水した。川の数ヶ所で人が流され、５０人ほどが救助され、５人死亡した。
＊参考事例　１９９９年　神奈川県・玄倉川増水事故
　　－　１８人が濁流に飲み込まれる。
　　２０００年　群馬県・湯槍曽川事故
　　－　鉄砲水の発生により１名死亡。

【山の遭難事故】

１月：北アルプス槍ヶ岳でテントに雪崩、７人流され４人死亡。
２月：栂池高原スキー場の林間コースで雪崩発生、７人名巻き込まれ、２人重態、２人負傷。
８月：白馬岳大雪渓で土砂崩落、２人不明。

【落雷事故】

７月：大分県・久住山で単独登山中の１名死亡。
８月：檜尾山で落雷、登山中の２人のパーティのうち、１人死亡、１人負傷。
７月：流山市の高校で屋外階段の手すりに落雷　－　放課後、薄曇の天気の下、約１００人がグラウンドで部活中の落雷、雷が地面を走りそばを歩いていた３人が負傷。
　＊参考事例　１９９６年　サッカーの試合中に落雷にあった男子生徒が重度障害となる
　指導者の責任問題が焦点となったが、１審２審では予見は不可能だという見方で無罪となる。２００８年、最高裁で予見可能と判断され、指導者に対して危険回避義務違反の過失があったという有罪の判決が下りた。

【突風　強風】

７月：突風でイベント会場のテント倒れ多数負傷　－　３００ｋｇ×６個のおもりが飛ばされ、おもりの下敷きになるなどして負傷者が出た。
　＊参考事例　２００４年　サッカーゴールが強風で倒れ、男子生徒が下敷きになり死亡。
　２００３年　びわ湖にて、強風注意報の中、出航したヨット転覆。７人が死亡・行方不明。

気象変化による事故例から学ぶ教訓と対策

１．自然は予期せぬこと、今までにあまりなかったことが偶発的に発生する可能性があることを知る

都市の生活に慣れた私たちには、自然への恐怖感、緊張感が欠如してしまっている。この欠如は事故を発生させる原因になる。自然の中の活動はいつも危険をはらんでいると認識することが大切。

＊事故例　青井岳キャンプ場事故：３０年に１度の大雨。前兆もなく大雨の天気予報もなく、引率者は予見できなかったと判断され、無罪となる。

２．天気予報（注意報・警報）、警告を甘く見ない

天気予報・警告を無視したことによって、多くの事故が発生している。

①できるだけ多くの情報網を使って正確な情報を得る

②情報を正しく分析して危険性を予測する　→　「危険の予知」

③危険性が予測される時は、速やかに回避の処置をとる　→　「危険の回避」

これらは、指導者がおこなわなければならない安全注意義務である。

３．過去の事故例を重視する

小さな事故例から危険回避の情報を得ることが大切。大きな事故発生の裏には必ずよく似た事故の前例がある。死亡事故までは至らない軽傷事故やトラブルなどが起こっていれば、いつか死亡事故へとつながる危険性がある。

【ハインリッヒの法則　　１（大事故）：２９（小事故）：３００（トラブル）】

４．常に五感を使って自然の変化や天気の変化に注意する

事故の前にはいくつかの予兆が起こっている。川で言えば、水の色・量、流れの速さ、浮遊物など、その予兆を見逃さないようにする。活動場所の地元の人の話、情報を得ることも重要。いつもとの違いが明確になる。

５．「正常化の偏見（バイアス）」を持たない

正常化の偏見とは、危険な状態に陥りかけても、自分だけは大丈夫、危険ではないと思いたい心理のこと。火災報知機が鳴っても誤作動だと思ってしまう心理。

過去の無事故体験・成功体験が事故の原因となる

→今までうまくいっているから･･･

過去の事故体験・失敗体験は事故予防に役立つ

＊事故例　びわ湖ヨット事件：１２人中、ライフジャケットをつけていた２人の子供とその両親が救助される。助かった２人の子どもは、海の経験がある父の指示で乗船時には必ずライフジャケットを着ていた。

６．気象変化による事故発生のパターンとその対策

急激な気象変化によるもの（気象の変化が急激で対応や避難が出来ない）

例）ゲリラ豪雨、突風、落雷

→　できるだけ早く危険を予知し、回避の行動をとる

段階的な気象変化によるもの

（時間の経過とともに徐々に状況が悪化していく）

例）台風接近、風が強くなっていく、継続した雨

→　時間の経過が危機感を薄れさせるため、危険域に入る前にプログラムの中止、変更をおこなう

大自然の危険を知らないで、野外活動をおこなうことが一番の危険である！！

情報提供

野外活動の安全グッズ紹介

福岡県キャンプ協会　会長　／　社団法人日本キャンプ協会　安全管理委員
大橋　光雄

野外活動で安全グッズを使用する場合、グッズそのものの特徴を理解していても、実際に使用する場面が想像できないと、安全に使用することは出来ないことが多い。安全グッズは①アウトドア、②防災、③軍物＆警察、④船舶　等のように用途別に分類することも出来るが、ここでは４つの「る」＝知る・知らせる・助かる・助ける（４Ｒ）を軸に機能別に紹介する。

● 知る

ハンディＧＰＳ（山&海）、ＰＮＤカーナビ、双眼鏡、コンパス、ラジオ、ＰＣ（ネットブック）、携帯電話、番外：ワンセグ、お風呂ＴＶ

● 知らせる

ビーコン（雪山）、無線機（ＣＢ＆アマチュア無線）、ストロボライト（海・夜間）、サバイバルミラー、サバイバルホイッスル（笛）、ライト、番外：カメラのストロボ

● 助かる

雨具、簡易トイレ、多機能ナイフ、虫よけ（電池式・スプレー式）、携帯カイロ、非常食＆行動食、浄水器（泥・海水・菌その他）、マウンテンストック（登山）、防水バック（カヌー）

＊多機能ナイフは要らないものが多く、緊急時に対応できないことが多い。サブ利用が望ましい。

● 助ける

ポイズンリムーバー、ファーストエイドキット、スローロープ、
ＰＦＤ（Personal Floating Device/ライフジャケット）

≪多機能な？･･･道具≫

携帯電話（高機能）、腕時計（健康作り～多機能）、自家発電ラジオ＆ライト、携帯太陽電池パネル、ウォータータンクパック

≪多機能な？･･･素材≫

ウール（猟師・漁師）、ダウン、フリース、サバイバルシート、透湿性素材（ゴアテックス）、コットン

＊それぞれの持ち味（＝寒さ対応・雨対応・暑さ対応・軽量コンパクト・防炎対応など）に合わせたゆとりのあるデザインのものを選ぼう。

≪防災対策商品紹介≫　協力：ダビンチインターナショナル（株）

・フードバー　：　バニラ味　１本８４ｇ　４００kcal コレステロールゼロ、保存期間５年
・ウォーターパック　：　滅菌済飲料水１２５ｍｌ、保存期間５年
・アルミブランケット　：　１３７ｃｍ×２１３ｃｍ、(体温保持率９０％、紫外線反射率９９％)

＊防寒・防暑効果が得られるだけでなく、光を反射させて居場所を知らせることもできる。防水加工されており雨よけシートとしても使える。毛布、担架等の代用として多目的に使用できる。

● まとめ

- 安全グッズの使用方法が理解できていること
  例えば、非常食・缶詰の保存期間や、ストーブなどの器具の使用方法・使用場所 等
- 安全グッズを携行する場面を理解できていること
  例えば、海・山・川などの地理的環境に合わせた携行品（ナイフ、ライト、笛、水、食など）
- 安全グッズ購入時は使い道が考えられる身近なものからそろえていく
  例えば、雨具・皮手袋・水筒・ウエア・帽子 等

実　習

楽しく学ぶキャンプの安全～ＲＭＥ(リスクマネジメントエクササイズ)体験～

社団法人日本キャンプ協会安全管理委員
高見　彰　・　水沢　利栄

ゲーム感覚で安全に対して少し意識を傾けてみよう。普段の活動またはＲＭＥの経験の有無を考慮し、２会場に分けてＲＭＥを体験する。

ＲＭＥ（リスクマネジメントエクササイズ）とは･･･

【安全対策】と【安全教育】が２本の柱となっているキャンプのリスクマネジメントの【事前の事故予防】【事故発生時の対応】【危険回避】の３つを主な内容としている。１つの問題に対し、個人で考え、グループ内で意見交換し、コンセンサスを求める過程の中で、個人が気づかなかった多様な対策や対応を聞き、個人の安全対策能力、事故対応能力を高めていく。

≪進め方≫

問題読み上げ→個人意見表示→グループ内で意見交換→個人意見表示②→グループとしての意見にまとめる→全体でのシェア（他のグループとの意見交換）

会場①　リーダー向け

危険予知トレーニング

ＫＹＴシート「野外炊事」のイラストを見て、危ないところがいくつあるか、個人で考える。その後グループ内で意見交換をおこない、全体でシェアする。

ＲＭＥ（危険回避能力問題）

正解のある、下記の４問題に取り組み、グループ内で話し合いをおこなう。

Ａ：まき割りの軍手

野外炊事で燃料に使う太いまきを､ナタを使って割らなくてはならない｡安全にナタを使ってまきを割るためにはどうすればいいですか？

Ｂ：雷からの避難

キャンプ場で野外炊事をしていたところ､急に天気が悪くなり､雷鳴が近づき､雨が降ってきた｡これ以上野外炊事を続けることは無理なので､避難することにしたが､どこへ避難するのがいいですか？

Ｃ：暑い時に倒れたらどうする

夏の気温が高く蒸し暑い日に登山をしていたところ､約１時間登ったころ､１人の子どもが気分が悪くなり歩けなくなった｡身体を見ると全身に冷や汗をかき、皮膚はベトベトである｡顔面は蒼白で頭も少し痛いという｡このときあなたはどういう処置をしますか？

Ｄ：川に落ちた時どうする

緩やかな流れの大きな川岸で魚釣りをしていたところ､足を踏み外して川の中に落ちてしまった｡川の流れはゆるやかだが水深は深く背がたたない。そんなときあなたはどうしますか？

答え　　A：まきを持つ手だけに軍手をつけ、ナタを持つ手は素手でまきを割る
B：炊事場から少しはなれたところにある、メインホールの中
C：衣服や靴を身につけたまま、仰向けに浮いて流されながら救助を待つ
D：足を高くした体位で寝かせ、汗を拭き、保温する

ＲＭＥ（事故予防・安全対策問題、事故対応・トラブル対応問題）
正解のない、下記２問題に取り組み、グループ内で話し合い、その後全体で意見のシェアをする。

ハチの巣

８月のキャンプ中、キャンプ場のテントサイトから約２０m離れた木の上約３mに、大きなスズメバチの巣が発見され、ハチが活発に活動していることもわかった。そのときあなたはどうしますか？
① すぐにハチの巣ごとすべてのハチを撤去する
② ハチの巣のある木の周囲にロープを張り､その木の上にハチの巣があることを、注意板で明示する。
③ 全員に口頭でハチの巣のあることを伝え､近くへ行かないように注意する。

肝試し中にショック症状
ある子ども会のキャンプで夜に肝試しをした。約３００mの細い山の道を２人ずつで歩いていく途中に、スタッフがいろんなお化け役になり、皆を驚かすことになっていた。半分ほどが終ったところで１人の子どもがある「お化け」に驚き、ショック状態となり、その場に座り込んでしまった。幸い症状は軽く、スタッフが休養室へ運び込んで大事には至らなかったが、その後のプログラムをあなたならどうしますか？
① すぐに肝試しのプログラムを中止する。
② 軽度のショック症状だったので、そのことを全員に伝え、注意を促してプログラムを続行する。
③ 軽度のショック症状だったので、そのことは特に全員に話さず、原因となったお化けだけは中止して、プログラムを続行する。

まとめ
何か起きたときの対処について考え、意見交換してスタッフで共有することでも、事故やケガは半減する。実際のキャンプではすぐに決断しなくてはいけない。また、その決断をスタッフに伝えて説得もしくはまとめていく必要がある。事前に体験することはリスクマネジメントにつながり、大切である。

会場②　ディレクター向け
ＲＭＥ（危険回避能力問題）＆オリジナル問題
下記２問題について、まず自分の意思表示をおこってからグループ内で話し合う。

スズメバチに遭ったらどうする（正解あり）
ハイキングで山の中を歩いているとき、急にスズメバチが２～３匹飛んできて、身体にまとわりつくように飛び回ってはなれない。いくら追い払ってもすぐに近づいてくる。こんなとき、あなたはこれ以上スズメバチの攻撃を受けないためにどうしますか？

答え　すぐに今来た道をもどる

落雷発生（話し合い時間６分、正解なし）

深夜、キャンプ場の近くで落雷。あなたならどうする？

① 子どもを５００mはなれた施設まで歩いて避難
② 子どもたちを分散させ、木の近くにしゃがませる
③ 子どもはテントに。ひたすら雷がおさまるのを待つ

ＲＭＥ応用編（演習）

実際に起こりうる状況での対処についてグループで話し合いをおこない、グループとしてまとめ、全体にシェアしていく。話し合いだけでなく演習もおこない、さらに実体験に近づけていく。

アレルギー症状、あなたならどうする？

キャンプのプログラムとして、そばクッキーとホットケーキを班ごとに焼いて食べました。参加者（小学校高学年４０人・８班・カウンセラー８人・スタッフ３人）全員が食べました。ところが食後、身体に赤い発疹が出たりぜんそくのような咳をするそばアレルギーの症状を示す子どもが各班に１人ずつ出ました。だんだん症状が重くなりそうです。

１．直ちにおこなわなければならないこと、重要だと思うことを５つ挙げよ。（話し合い時間８分）

⇒ ≪重要なことは≫
記録、応急処置吐かす・水を飲ます、１１９通報、病院・親への連絡、二次被害の防止、他の子のケアなど

２．さらに卵アレルギー、小麦粉アレルギーを発症する子も何人かいる。このようなことが起こらないようにするためにはどのようにすればよかったのか。（話し合い時間８分）

⇒ ≪参加者の話し合いより≫
事前の情報収集（調査票、参加者カード、対処方法など）、食材・メニューの検討、保護者説明会（個別でも）

３．「宗教上の問題で豚肉を食べることが出来ません」と参加者調査票に記入があったのに、見落として餃子の中に入っていた豚肉を食べさせてしまった。キャンプ終了後、保護者がその事実をしり、ものすごい剣幕で抗議してきた。どう対処すべきか。（話し合い時間８分）

４．そばアレルギーの子どもの保護者への第一報の電話をかけてください。

【３人が主催者側、２人が保護者側になりきって演習】

主催者側：伝える内容は？電話で注意することは？
保護者側：モンスターペアレンツの保護者を演じてください。

⇒ 主催者側が保護者に伝える内容は、事故が起きた時刻、様子、症状、処置など。電話では落ちついて、丁寧に、用件をしっかりと伝えること。陳謝することも大切。

まとめ

アレルギーの問題など、健康調査表の見落としは避けたい。必ず複数の人間でチェックすることが大切。ＲＭＥは、まず意思表示が最初で、その後話し合いのため、みんなの意見が聞きやすい。実際に起こりうる可能性が高いことに関して、実際にスタッフ研修などでやってみると良い。

選択プログラム A

キャンプカウンセリングの視点からみた心の安全

大阪人間科学大学 准教授 ／ 社団法人日本キャンプ協会 普及サービス委員
森園 忠勝

話を聞くということは相手の気持ちを受け止めるということである。キャンプ中、何か作業をしながら子どもの話を聞いたりしていないだろうか？「聴く技術」をみがく一歩として、自分の“ きき方 ”に気づき、知ることが大切。

ねらい：コミュニケーションの中でお互いにどのように“ きき ”“ はなし ”ているのかに気づく

実習　３人グループに分かれ、話す人（A・B）と観察する人（C）の役を決める

ルール：テーマに沿ってAが話をする。Bはその話を聞いてAの言わんとすることをなるべく自分の言葉に置き換えて「Aさんは、･･･ということを言いたいのですか？」とAに確認する。Bの確認に対してAは、自分の本当に言いたかったことと一致していれば「はい」、違う場合は「いいえ」と言う。Aが「はい」と言ったら、今度はBが言いたいことを話す。Aが「いいえ」と言ったら、Bはもう一度言い直してみる。２回目でAが「はい」と言ったらBは自分の発言が出来る。２回目もAに「いいえ」と言われたら、Aはもう一度いいたいことをBに話してから、Bに発言権が移る。

Bに発言権が移っても、同様のルールで進めていく。その間Cは、AとBの様子を観察し、「観察メモ」にチェックし、ルールが守られているかを確認する。

話のテーマ：①子どものころの遊び／②私が最近経験したこと／③私が大切にしていること

※A・B・C役をそれぞれが１回ずつ体験する

＜参加者のふりかえり＞

- 与えられたテーマでの話が難しく、相手の話をいちいち確認しなきゃいけない状況でうまく話が出来なかった。
- 考えながら話すと、間が空いてしまって難しい。
- 目を見て話してくれるので、伝えたい気持ちが伝わって、聞き手としては安心した。
- ３回目になるとルールに慣れてきて、話すほうが考えながら話し、言葉に詰まるとジェスチャーで伝えようとする（動作がでてくる）ことに気づいた。
- 自分の言葉に置き換えるのは、価値観が同じなら受けられやすいが、違うと伝わりにくいと感じた。

まとめ

私たちは普段の会話で、相手の考えを予測して聞き、話している。今回のようにあえて話の内容を確認することで、相手の話の心の気持ちまで感じ取れているかを確認でき、話の受け止め方や思い込みに気づくなど、自分のくせを見つけ出しやすくなる。

この体験で大切なのは、自分が気づけなかったことに気づける、観察者からのフィードバックである。自分の持つイメージも他者の持つイメージも自分として受け止めることによって、自分の領域が広がるので、「この人は私のことをわかっていない。」と決め付けるのではなく、受け止める努力をしてほしい。

コミュニケーションをとることは難しいが、トレーニングによって鍛えることができる。自分のくせに気づき、くせ（弱いところ）を直してコミュニケーション力をアップさせよう。

選択プログラム B

プログラム指導現場に見る安全の目

東大阪市野外活動センター自由の森なるかわ 所長
奥　義博

キャンプでは、子どもは緊張した状態にいる。この緊張感を和らげることが必要と実感している。能勢アウトドアスクールでの取組みを紹介し、実際にプログラムを体験してもらう。

１．能勢アウトドアスクール（以後ＮＯＳ）とは

専門技能を持った職員が経験とノウハウに基づくさまざまなプログラムを備え、提供する。実施するプログラムは「ハート（ＨＲＴ）プログラム【豊かな人間関係作りのトレーニング】」で、メインは「ハートアクティビティ」と呼ばれるＡＳＥ・イニシアティブゲームの要素を加味したコミュニケーションゲームである。

２．ＮＯＳ利用者増の２つの要因

ハートアクティビティと食事。ハートアクティビティを通して、キャンプ期間中“居心地のいい空間”を提供し、充実した食事で心の余裕を作り、結果として全体のプログラムを子どもたちが楽しめるようになる。これが満足度につながり、利用者が増えた。

３．実践例の紹介

スポーツチームにおける人づくり事業、大学新入生キャンプ、職員人材養成、児童支援プログラムなど、宿泊型や日帰り・数時間型などさまざま形態で実施している。
効果は、モチベーションの高い人たちがおこなうハートプログラムが最も高く、参加者のモチベーションで大きく変わってくる。

４．ハートアクティビティの体験

約束ごと：話をよく聞いてルールを守る　／　積極的に取り組む　／　他の人を傷つけない
実施したアクティビティ：バースディリンク、数字回し、サークルボール、インパルス（情報伝達アクティビティ）、インパルス戦争、カテゴリーバスケット、つみき自己紹介、マジックミラー、ヘリウムリング、トラストチェア･･･

・課題に失敗したとき、言葉で傷つけたり、ケンカが起きたりすることもある。特に小学生に多い。事前に約束ごとで、失敗してもいいということを伝えておく。
・「３回で成功させて･･」「前回より早く･･」という課題を出したとき、成功できないときもある。その失敗を無しにするのか有りにするのかは、常に悩むところ。達成感を味わわせるために、失敗を成功にみせてあげることも、時には必要である。
・全員がやりたいことは全員できるようゲームを組み立て、子どもたちの気持ちも受け止めていくことが大切である。

人間関係トレーニング（与えられた課題に対し、誰かが意見を言う）の中で、自分の意思を誰かが聞いてくれると実感できる。“気持ちを受け止められた”キャンプは次へつながるのだろう。

選択プログラム C

安全なキャンプのための対象者の理解とは

財団法人大阪府青少年活動財団企画推進室課長 ／ 社団法人日本キャンプ協会指導者養成委員長
今井　正裕

安全なキャンプのためには、キャンプ参加者の個人情報をどういう形で収集し、何を取り出し、何を読み取り、どのように扱い、どう反映させるのか。キャンプを楽しく、安全なものにするための対象者の理解とは･･･

１．事前の「個人データ」の収集がなぜ重要なのか

事業終了後に実施する、保護者アンケートでの「Q．お気づきの点があればご記入ください」欄に記入された内容から「トラブル、クレームの類」を拾い挙げると･････

⇒　保護者が「キャンプに対して」、また「子どもへの対応に対して」、どのようなことを求めているのかがわかってくる。「事前にお伝えしなくても、薬を飲むことは分かっている、と思っていた」、など保護者との考え方の矛盾点なども見つけることが出来る。

天気では「予測→観測→分析→共有」という流れを踏んで災害を未然に防止するが、一人一人の様子も、同様に「予測から、事象発生→観察→ふりかえり→分析→共有」というプロセスが重要。

２．事前に収集した重要な「個人データ」をどう活用するのか

実習①　「キャンプ事業参加カード」の情報から何を取り出し、何を読み取り、何を拾い出し、それをもとにどのような対応・対策を考える必要があるでしょうか。

＜５分程度、個人で考える。その後、１５分間
グループごとに話し合い、５つの項目を挙げる。＞

⇒ 何を読み取ったか

アレルギー反応、夜尿ケア、乗り物酔い、身長･体重、普段の様子、スキーの経験などから「保護者の、我が子に対する思い」。同時に「子どもの様子の把握」を保護者だけに依存し過ぎることも危険である。

３．「個人データ」をどう収集するのか

実習②　実習①を受けて、「参加者カード」の情報から「情報の取り出し、読み取り、拾い出し、それをもとにした対応・対策」を考える際、事前にこちらのメッセージをどのような方法で伝えておくか。参加者説明会、参加案内、出発時の３つで挙げてください。

＜２５分間グループ毎に話し合い、模造紙に書き出していく。＞

４．安全なキャンプとは

「キャンプ＝非日常的な場面」の設定であり、それによって人の心身・行動が不安定になり、ケンカ・忘れ物・失くし物・ケガ・事故などが起き、クレームとなる。このクレームが、キャンプ継続の危機を招き、組織･団体運営の危機を招く（＝マイナスの連鎖）。

キャンプの安全は、「安定した心身状態」から生まれるものであり、そのためには「対象者理解」による、「思いのズレの修正」と「不安定な状態の回避」が重要である。キャンプ実施者・キャンプ参加者（保護者含め）どちらか一方の問題ではなく双方で考え、つくりあげていくものである。

選択プログラム D

救急法まるごと体験！～応急処置からＡＥＤまで～

神戸ＹＭＣＡ　主任主事
宗行　孝之介

救急は、どれだけ実践経験があるかが大きいが、自分から進んで実践することは出来ない。危険なところは絶対ミスが許されないところでもあるため、講習会等で模擬体験しておくことは重要である。

１．野外活動中の救急事例

私個人の持っている２８例のうち、うまくいったのは２例しかない。救急時は、第三者（救助隊・救急車等）に事故現場を伝えられるか、第三者が分かる目標（ランドマーク（陸標)、動かない目標）を指示できるか、など事故に遭遇した時のパニックにどう対応し、冷静な判断がおこなえるかが大切である。

２．救急法以前の問題

①パニックコントロール

自分に合ったパニックコントロールの仕方を探しておく。例えば、深呼吸する、タバコを吸う、複数で関わる、などもパニックコントロールとなる。

②C³I（command, control, communication, intelligence）　→軍事用語

指揮をとる（→緊急の任務分担付与)、コントロール（→仕事の分業化)、コミュニケーション（→情報の伝達)、インテリジェンス（→情報収集）

③携帯電話のカバーエリア、電池のバックアップ

山などキャンプ地においてカバーエリアを事前に確認しておく。スタッフがそれぞれ違った携帯会社にしておくとカバーエリアが広がる。また、電池の予備も準備しておく。これらは、パニックコントロールにもつながる。

３．救急法の要は二次災害防止

助けに行った、その人がケガをすることは防がなければならない。救助する際は必ず手袋をつけ、人工呼吸をする時はフィルムを使う(→嘔吐や出血をしている場合が多い)、冷たく見えるようだが、二次災害を防ぐためには徹底しなければいけない。また、救急備品は人に用意させないで自分で用意する。その場で不足品が発覚しても手遅れ。

ロープを結べない人はロッククライミングに行かせない、パラシュートは必ず自分でたたむ、なども二次災害を防止した対応の一つである。

４．By stander【側にいる人が何かしていたら救われた命がある】

胸骨圧迫は毎分１００回ペースでと言われているが、厳密なカウントよりも、もしその状況に遭遇したら救急車が来るまでやり続けること。不安な場合は、消防と電話でつなぎっぱなしで指示を仰いでもよい。

５．ＡＥＤ

医師が使う高電圧ではないし、医療行為ではないので、万が一間違っても罪に問われることはない。傷病者の意識がなければすぐ気道確保をおこない、意識がある場合は本人が一番楽な体位を選ぶ。

実習　２人一組になってＡＥＤをおこなう。

2月1日(日)　13:00～14:20

講　演

野外活動に必要な保険の知識

株式会社ワイサービス
浜崎　正三

事故予防に重点を置くようになってきても、事故を完全に防ぐことはできない。保険とは何か、またどのような保険があるのかなど、実際に保険が支払われた事例も含めて、基本的な保険の知識を学んでおきたい。

１．保険とは

事業をおこなう際に考えられるリスクは「人」と「物・財産」に分けられる。その中で、野外活動で必要とされているのは「傷害保険」と「賠償責任保険」である。

保険に入るということは、安全な行動意識を買うということであり、保険に入っているから何をしても大丈夫というものではない。「万人はひとりの為に、ひとりは万人の為に」

＊傷害保険

急激性・外来性・偶然性の３要素すべてを充たす事故によって身体に被った傷害に対して保険金を支払う保険のこと。靴ずれやしもやけは急激性に欠けるため対象外。

＊賠償責任保険

一定の事由により他人に損害を与えたため、法律上の賠償責任を負担することによって被る損害に対して保険金を支払う保険のこと。指導者の過失によって死傷させた、作った食事で食中毒が出た、他人から預かったものをそのままの状態で返せなかったなど。（施設所有者･生産物･受託者）

＊ボランティア活動保険

ボランティア活動中、または行き帰りで起きた事故に対して支払われる。海難・山岳救助ボランティア、野焼き・山焼き・チェーンソーをおこなう森林ボランティア、銃器を使用する害獣駆除ボランティアは対象外。

＊スポーツ安全保険

スポーツ・文化・ボランティア活動などをおこなっている団体が加入できる、傷害・賠償責任保険のこと。安い掛け金で補償が受けられる。

２．損害賠償とは

他人の行為によって「財産的な損害」や「精神的な損害」が発生した場合に、加害者にその損害を補償させることを「損害賠償」という。

＊加害者の責任

①道義的責任 ―――― 社会人として果たすべき責任

②法律上の責任 ―― 行政上
　　 ―― 刑事上･･･反社会的なおこないに対して、個人が問われる責任。
　　 ―― 民事上･･･過失など金銭的埋め合わせに対して、組織にも問われる責任。

※キャンプでは刑事上と民事上の責任があり、そのほとんどが民事上の責任に関してである。

※参加者間の行為で死傷事故が発生した場合、加害者の両親のほか、代理監督義務者としてリーダー引率者も責任を負わされている。

＊故意と過失

「故意」とは、自分の行為によって他人を殺したり、傷つけたりすることを知りながら、あえてその行為をするという心理状態。「過失」とは、自分の行為によって他人の死傷という結果が発生することを認識、予見して、その結果の発生を回避しなければならなかったのに、注意を怠って結果の発生を認識せず、または結果の発生を回避しないこと。

予言義務・回避義務、管理義務（天候、食事など）、活動中の立ち合い監督義務など、指導者として果たすべき義務は多くある。

▽栂池高原スキー場雪崩事故　大学のスキー実習中、講師と学生が雪崩に巻き込まれ、学生２名死亡。前日からの積雪で雪崩の危険性があり、当日コース上の「立ち入り禁止」の警告を無視してコースに進入した。

⇒　実施段階における指導体制に問題はなかったのか。非常勤・業務委託のスタッフが多く、現場でのミーティングは５分程度の話し合いと、参加義務を持たない夜のミーティングのみであった。指導者（引率者）、学校側は、正課授業中における自己なので、業務上過失致死傷罪を問われる可能性が高い。

３．キャンプに関する各種事故・支払例

▽２００５年６月　教育委員会実施の生活体験学校キャンプにて、引率指導者の離れた隙に、男子中学生が池で遊泳中に溺死した。遊泳禁止の看板は設置されていたものの参加者への注意徹底がなされていなかったとして管理責任者の自治体が５０％の過失責任を負うこととなった。【賠償責任保険】 保険金２，９３０万

▽２０００年８月　ボランティア団体主催のキャンプ活動で、男子小学生が、カレーの具材を切っている際に誤って左示指を切断。団体が監督責任として５０％の過失責任を負った。【賠償責任保険】 保険金３１０万

▽２００５年８月　ボランティア団体の男性スタッフが、夜間のキャンプファイアー中、風にあおられたトーチの火で左手などに重度の火傷を負った。
【傷害保険】 保険金１２０万

４．事故災害に学ぶ

＊ヒューマンファクター

人間の過ちで事故は起きている。「絶対」はない。

・信じられないミス
・いつもと違う心理状態
・慣れからくる慢心
・人間の判断、意志決定に影響を及ぼす要因（環境・体力・人間関係）
・人間の情報処理の限界

これらが要因となり、事故が起きている。

＊ヒヤリ・ハット（ハインリッヒの法則）

ヒヤリ・ハットした出来事がなぜ事故に発展しなかったのかをよく考えていくことが大切。どんな小さなことでも報告しあい、分析する。

「Plan(計画)、Do(実行)、Check（チェック）、Action（修正）」を長期的に継続することで、活動を安全なものにしていく。

危険だからさせないのではなく、ひとつひとつチェックすることで活動を安全にしていき、危険な体験もさせる。冒険・教育活動のための安全で質の高いキャンププログラムを！

平成 20 年度　日本キャンプ協会ＢＵＣ対象事業

野外活動指導者のための
リスクマネジメントセミナー

大自然の中で仲間とともに活動するキャンプは、教育効果も大きい反面、危険も多いものです。
大きな危険要素となる自然環境の中でも、予期せぬ豪雨豪雪、突風、雷など「気象の変化」に関する事故が近年増えてきました。
今回は「気象変化と野外活動の安全」をテーマとして、キャンプの安全について、皆さんと共に考えていきます。

基調講演　1月31日(土)　13:45～15:15　(90 分)

『はげしい気象変化の原因をさぐる』

［講 師］ 片 平　敦 氏 (関西テレビ『スーパーニュースアンカー』お天気キャスター・気象予報士)

提　言

「気象変化による野外活動の事故を検証する」
(財) 関西テレビ青少年育成事業団　顧問　畠中 彬 氏
((社)日本キャンプ協会　安全管理委員会　副委員長)

実習 (1日目)

「楽しく学ぶ、キャンプの安全」
～RME (リスクマネジメントエクササイズ) 体験～
(社) 日本キャンプ協会　安全管理委員長　高見 彰 氏
(社) 日本キャンプ協会　安全管理委員　水沢 利栄 氏

情報提供 (1日目)

「野外活動の安全グッズ紹介」
(社) 日本キャンプ協会　安全管理委員　大橋 光雄 氏

講演 (2日目)

「野外活動に必要な保険の知識」
株式会社ワイサービス　浜崎 正三 氏

演習　選択プログラム (2日目)
“キャンプ現場における、心と体のリスクマネジメント”

A
「キャンプカウンセリングの視点からみた心の安全
～こんな言葉・態度でキャンパーを傷つけていませんか？～」
大阪人間科学大学　准教授　森園 忠勝 氏

B
「プログラム指導現場に見る安全の目
～コミュニケーションゲーム指導から学ぶ～」
(財) 大阪府青少年活動財団　奥 義博 氏
(東大阪市野外活動センター自由の森なるかわ　所長)

C
「安全なキャンプのための対象者の理解とは
～事前の個人データ収集から活用まで～」
(財) 大阪府青少年活動財団　今井 正裕 氏
((社)日本キャンプ協会　指導者養成委員会　委員長)

D
「救急法まるごと体験！～応急処置からＡＥＤまで～」
神戸ＹＭＣＡ　主任主事　宗行 孝之介 氏

＜日　程＞　２００９年1月31日(土)　13:00～21:00　・　2月1日(日)　9:15～15:00
＜会　場＞　大阪府立青少年会館 (ＪＲ環状線「森ノ宮」駅から西へ 500m・地下鉄中央線「森ノ宮」駅から西へ 300m)
＜参加費＞　全期間参加　：　一般　5,000 円　(日本キャンプ協会会員　4,000 円)　学生　3,000 円
1日のみ参加　：　一般　3,000 円　(日本キャンプ協会会員　2,500 円)　学生　2,000 円
＜定　員＞　70名　(先着順、定員になり次第〆切ります)
＜対　象＞　機関・施設・団体等の自然体験活動・野外活動・野外教育関係の指導者、リーダー　など

主　催　社団法人日本キャンプ協会・財団法人関西テレビ青少年育成事業団
主　管　大阪府キャンプ協会
協　力　近畿ブロック支部協会・財団法人大阪府青少年活動財団

プログラム

1月　31日（土）	
13：00	受付
13：30	開会式
13：45	基調講演 「はげしい気象変化の原因をさぐる」 （片平 敦 氏）
15：20	提　言 「気象変化による野外活動の事故を検証する」（畠中 彬 氏）
16：40	情報提供 「安全グッズ紹介」（大橋 氏）
17：30	実習「楽しく学ぶ、キャンプの安全」 （日本キャンプ協会 安全管理委員会）
19：00	夕食・交流会
21：00	（プログラム終了）

2月　1日（日）	
9：00	受付
9：15	演習　選択プログラム（８０分×２回）
～ 10：40	A「キャンプカウンセリングの視点からみた心の安全」（森園　忠勝 氏） B「プログラム指導現場に見る安全の目」（奥　義博 氏） C「安全なキャンプのための対象者の理解」（今井　正裕 氏） D「救急法まるごと体験！」（宗行　孝之介 氏）
12：00	昼食（軽食をご用意いたします）
13：00	講演 「野外活動に必要な保険の知識」（浜崎 氏）
14：30	閉会式
15：00	（プログラム終了）

リスクマネジメントセミナー　参加申込書

ふりがな 参加者氏名	（日本キャンプ協会会員番号　　） （年齢：　　才）（男・女）
所属・活動団体名 又は 学　校　名	（一般・学生）
連　絡　先	〒　　－ TEL　（　　）　FAX　（　　）《自宅・職場》
E－mail	@
参加期間 （いずれかに○を）	全日程参加・１日目のみ参加・２日目のみ参加・その他（　　）
選択プログラム （２日目）	前　半　第１希望：　　第２希望： 後　半　第１希望：　　第２希望：

この申込書はＦＡＸでご返送ください。郵送の場合は、下記住所の大阪府キャンプ協会宛にお送り下さい。

※ ご記入いただいた情報は事業運営上必要な事務に使用いたします。また今後各種事業のご案内を送付させていただきますので、ご不要の方は右記よりお申し出下さい。また活動の様子など記録写真を撮らせていただきますのでご了承下さい。 ☐ ***今後案内を希望しません***

お申し込み・お問い合わせ

〒540-0003　大阪市中央区森ノ宮中央 2-13-33　財団法人 大阪府青少年活動財団 内

大阪府キャンプ協会　（担当：今井）　http://www.osaka-camping.jp/

TEL　06-6942-5146　FAX　06-6942-2448　E-mail　osaka@camping.or.jp

リスクマネジメントセミナー（関西）を主管して

平成１７年度から開催しております本セミナー関西会場が、今年度も大阪において開催され、その主管の任を担えましたことに感謝申し上げます。

４回目となります今年度のセミナーも、日本キャンプ協会安全管理委員の方々と、これまでの課題・評価を踏まえ、昨年９月頃より打合せを重ね準備を進めて参りました。その中で大きな話題となったのが「この頃の気象異常は、野外活動に大変な影響を与えている･･･特に今夏は･･･」という、「空模様・天気・気象」のことでした。シーズン中に起こる野外活動にまつわる事故の原因は「異常な天気・気象」なのか、それとも野外活動に関わる人々の「無知・知識不足・認識不足」なのか、このことを一度、取り上げてみよう、と４回目の企画をスタートさせ、セミナー全体の構成に取り組みました。

今回も、本セミナーを「野外活動指導者のために･･･」と銘打っている通り、

①“現場で活動する野外活動指導者”を主な対象に据え

②“より実践的な内容”を選び、

③“様々な視点からの切り口”で、「リスクマネジメント」を考えるきっかけとなることを主眼に置きました。

実施会場は、例年通り、郊外の野外活動施設ではなく、大阪市内に立地する研修施設ではありましたが、「より実践重視」のセミナー構成を目指しました。

年末年始にかけての短い募集期間ではありましたが、近畿だけでなく、北海道、宮城、福岡、広島、愛知などからも、合わせて９８名の野外活動関係者の参加を得て、二日間にわたり活発なセミナーが展開されました。多くの若いリーダーの方々の参加をいただいたことも特徴でした。

基調講演には、現役の“お天気キャスター”である片平敦氏に「はげしい気象変化の原因をさぐる」と題するお話を、テレビ番組での「お天気コーナー」さながらに、難解な気象用語や、専門的な気象現象をわかりやすく丁寧に、またユーモアを交えて講演いただきました。経験豊富な片平先生のお話しは、時機を得た発題でもあり、その後の「提言～気象変化による野外活動事故」の検証とも併せて、セミナーの二日間に渡り、参加者一人ひとりの「安全指針」として「気象の重要性」を認識させるテーマであったと、感じました。

安全管理委員会が安全教育を楽しく行うことを目標に開発し普及に取組んでおりますトレーニング教材としての「ＲＭＥ（リスクマネジメントエクササイズ）実習」では、課題集冊子も用いて、より実践的な「安全教育導入プログラム」となったエクササイズを体験していただきました。

また演習では、毎回、興味・関心の非常に高い「心のリスクマネジメント」について、「カウンセリングの視点」、「プログラム指導上のディレクターの視点」、「対象者理解の視点」そして「応急処置の視点」から、若いリーダー層の方々の「援助技術」のレベルアップを、また、中堅ディレクター層の「安全意識」の喚起を、それぞれ目指すなど、各セッションにおいて質・量とも非常に充実した内容を提供できたのではないか、と感じております。

本セミナーの最後には、野外活動指導者にとって必要な「保険の知識」について、最近のケガ・事故状況をもとにお話をいただき、「ケガ・事故を起こさない意識とともに、必ず保険に入る認識の重要性」について気持ちを新たにいたしました。

最後になりましたが、今回のセミナー開催にあたり、共催として多くのご支援、ご協力をいただきました財団法人関西テレビ青少年育成事業団に感謝申し上げます。

また、「より実践重視」の企画にご協力いただき、充実した内容を各セッションに盛込んでいただきました各講師の方々に感謝申し上げます。

参加者の皆様、スタッフの方々、そして会場となりました大阪府立青少年会館の方々始め多くの関係者の皆様、ありがとうございました。

大阪府キャンプ協会
事務局　今井　正裕
(財団法人大阪府青少年活動財団)

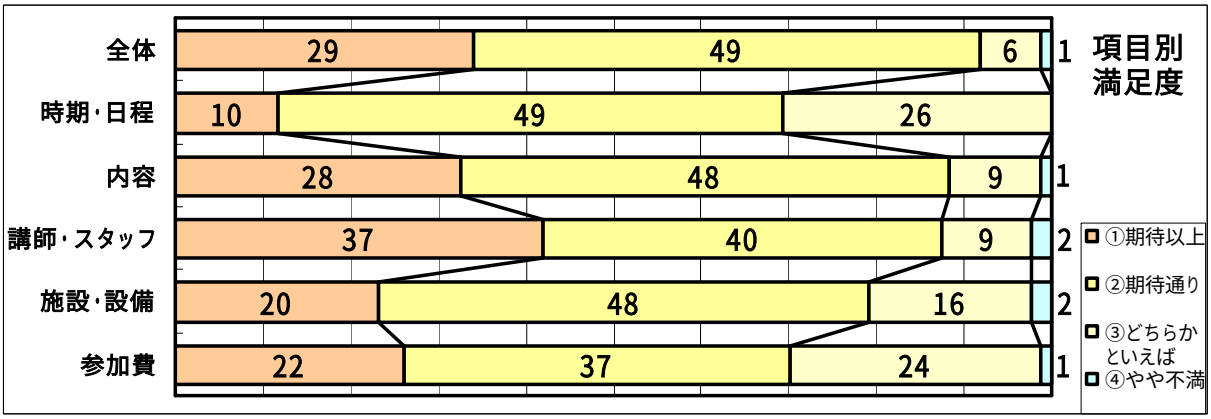
アンケート結果

参加者の構成　（２会場合計、総アンケート数８６）

性別	男性	女性	不明	合計
	56	30	0	86

年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	不明	合計
	9	31	11	8	10	12	5	0	86

満足度



参加理由

・メインテーマの「気象」にポイントを置いた、これまでにないアプローチに興味有り。
・ＡＥＤ体験できることや、選択プログラムなど、内容に興味を持ったので。
・仲間から勧められたことと、屋外活動における危険性というものを自分なりに再認識するため。
・リスクマネジメントに関するスキルアップのため。
・頭で理解してもなかなか身にならないと思っていたのと、体験で学ぼうと思ったから。
・キャンプでの知識をふやしたい、また同じ目的を持った人たちと話がしたい。

参加しての感想

・実習、実践を通して、机の上では得られない“実際の経験”を得られることが大きかった。そこから自分に足りない視点、能力をはっきりと自覚することができた。
・やはりＲＭＥをもう少し（もっと）突き詰めたい。
・想像していたよりも様々な地域から大勢の方が参加されていて、普段話せないような地域、立場の方々との交流はとてもよい刺激になった。
・テーマを基にしたセミナーはとてもよい。実例紹介なども入れてほしい。
・主催事業等の参考になった。
・若い人が多くて、心強く感じた。
・時間の流れがスムーズで、あっという間に終った感じだった。
・どのプログラムもすばらしかった。座講と体験学習のバランスもよい。
・ふりかえりの内容をもっと詳しく聞きたかった。
・このセミナーに参加していつも感じることは、指導者の果たす役割の大きさや責任の重さについてだと思う。「知らなかった」では済まされないことがたくさんあり、ここで学んだことをしっかり身につけ、気持ちをひきしめて活動に活かしていきたい。

内容についての希望

・セミナー全体に関して
　統一した具体的なテーマのあるもの、２～３人の実習形式、グループ討議を含むもの、実技演習を含む内容、選択プログラムの１コマの時間を長くしっかりさせる、対象をリーダー・ディレクターにしぼった内容
・希望するテーマ
　「下見について」「ゲーム導入の際の失敗事例、解決法」「法的アプローチ・保険的アプローチのもっと深めたもの」「不平、不満がでないキャンプの役割分担のしかた」「保護者対応（クレーム含む）」「子どもに関すること」「子どもとのうまい接し方」「キャンプカウンセラーとしてのあり方」「個人情報保護法とキャンプ」「事故対応のシチュエーション」「気象」「心のリスクマネジメント」「話の聴き方」「リーダーに身近な事象・体験について」「危機予測、危機回避」「野外での実践プログラム」「食育を含めた食の安全」など

福岡会場　各プログラムの感想

▼ 基調講演「気象災害と安全を考える」
・天気図を書く時間が無かったので、残念だった。講演内容は大変よかった。

▼ 提言「キャンプの安全を考える」
・雷の説明はとても印象に残った。映像も使い、とても分かりやすかった。
・安全でない行為（人的要因）を具体的な内容で説明をしてくださり、理解しやすかった。

▼ 情報交換会
・いろいろな指導者の方と関わり、お話ができて、非常に勉強になった。

▼ 選択プログラム
「ＣＰＲ＆ＡＥＤ体験」
・指導そのものは指導者であるため必要ではないが、指導方法を学んだ。
・実際にＡＥＤ、ＣＰＲをおこなえたので、良い経験になった。ＡＥＤの本物のパッドも見ることができ、とても貴重な体験になった。

「森に潜む危険体験」
・かぶれる植物やヘビ、ハチ等に噛まれた（刺された）時の対処法等、実際に森の中で学習し、実物を見れたのがよかった。
・もう少し少人数でゆっくり観察しても楽しいかも。

▼ 提言「幼児キャンプの意義と安全」
・質疑が多くて時間が押した。（個人的には、もっとしたかったが遠慮した。）
・コンセンサスを求める過程で、他の人と話し合い、意見交換ができたことがよかった。

▼ リスクマネジメントエクササイズ
・体操するのかと思っていた。
・グループワークとしても効果大。最も盛り上がりがあった。
・様々な意見が聞け、また様々な視点が持て、面白かった。自分が意見を持てるようにもっと勉強していきたいと思う。
・非常に勉強になった。しっかり意見を述べ、聞いて、考え、答えを出すのが難しかった。しかし、たくさんの考えを吸収できた。
・もう少したくさんの設問をおこないたかった。

▼ 全体で印象に残った事柄
・全体的に楽しいセミナーだった。
・実践で最も気をつけるべきリスクは、生命にかかわる対応ではないかと考えている。そういうことを考えると選択プログラムの中で参加したＣＲＲ＆ＡＥＤ体験はとても勉強になった。
・「危険を知ることで危険でなくなりはじめる」という言葉が印象に残っており、今後も学習をしていきたいと思った。
・「気象災害と安全を考える」では事例に多くの気象情報を集め、いかに安全にキャンプ生活を楽しむかを学び、気象記号も勉強し、今後天気図を見るのも楽しみとなった。
・ＲＭＥを最後のアクティビティにしたことがよかった。
・リスクマネジメントは、実体験を積むしかないのだと感じた。
・ＲＭＥで、一つの問いに様々な考え、見方があることを学んだ。
・「リスクマネジメントエクササイズ体験」ディスカッションはとても楽しかった。１．２．３番とそれぞれ意見があり、意見を言うのも楽しかったし、聞くのも楽しかった。
・全体の流れの時間が不安定だった。スケジュールどおりに動けていない。

大阪会場　各プログラムの感想

▼ 基調講演「はげしい気象変化の原因をさぐる」
・わかりやすい気象のメカニズムを教えていただき、空模様と予報を合わせて判断することができそう。
・パワーポイントを使いながら、具体的な数値や様子を示して説明されており、とてもわかりやすかった。
・時間が短く感じた。
・例えば、観天望気について、その理論的な実証とかそういったモノがあっても面白かったかも。

▼ 提言「気象変化による野外活動の事故を検証する」
・ニュースとしての事故でなく、事例として説明していただいたことで、身近なものとしてとらえられ危険予測や判断の重要さを感じられた。
・事故の紹介ではなく、その事故から学べること、言えることについての話が聞けると学びも大きくなったと思う。
・もう少し視覚にうったえるものがあってもよかった。

▼ 情報提供
・実際に手にして試す、そんな時間が取れればもう少し面白いと思った。
・会場の設定が気になった。立って見ていたため、前の人でグッズもパワーポイントの説明で示されたものも見えなかった。
・あるものの紹介ではなく、さまざまな使用方法、工夫など経験を通しての情報が聞けると良かった。

▼ 実習「楽しく学ぶ、キャンプの安全」
・ＲＭＥは何度もやっているのに、忘れていることや他の人の意見にハッとすることがあり、新たな気づきもあった。今までにないロールプレイング（電話をかけたこと）は、新鮮だった。スタッフ研修などでやってみたい。
・話に聞くのと、自分で体験することの違いを確認できた。
・時間が足りないといった感じがした。子どもとする場合･･･という話があってもよかった。

▼ 選択プログラム
「キャンプカウンセリングの視点から見た心の安全」
・自分のコミュニケーションをする時の態度や姿勢を再発見できてよかったです。
・“ 他者から見た自分も自分 ”さらに意識して聴き方、伝え方に注力したいです。
・実習の後、実習を進める際の留意点などについてお話があればより参考になったと思います。

「プログラム指導現場に見る安全の目」
・コミュニケーションゲームを通し、実施方法、声の掛け方、間のとり方を学べた。
・限られた時間を最大限活用してのファシリテーション、大変参考になった。
・次回はゲームの進行の失敗事例とその解決法を学んでみたい。

「安全なキャンプのための対象者の理解とは」
・個人データの収集や活用は、いつもやっているようでまだまだ足りない部分があることに気付いた。他の人の意見や考え方をたくさん聞けてよかった。
・参加者（保護者）アンケートからの気づき、事業実施前の参加者カードからの読み取りをもっともっと大切にしていこうと思った。
・時間が少ない。内容については満足であり、セミナーの目的に最も合致しているので、もっと時間をかけたかった。
・実習を終えてのまとめの話の時間がもっとあるといいと感じた。

「救急法まるごと体験！～応急処置からＡＥＤまで～」
・救急の事だけでなく、対処のやり方やまずはパニックになってもどうやって落ち着かせていけばいいのかがわかってよかった。
・ＡＥＤを直接体験できてよい経験になった。
・救急法をあきらめずに勉強していきたいと思った。

▼ 講演「野外活動に必要な保険の知識」
・今まで保険に関して全く知識がなかったので、保険について知る良い機会となった。
・少し難しい話だったが、リーダーとして取らなければならない責任の重さを実感した。
・講演のすすめ方がやや一方的。実例をあげて詳しく解説してもらった方がわかりやすい。
・保険金の支払例について、もっと掘り下げて話を聞きたかった。例：過失がどんな点にあったのか、等。

▼ 全体で印象に残った事柄
・食事を用意していただけたのは助かった。また、資料類がきちんと用意されていてすばらしいと思ったし、スタッフさんがはきはきと笑顔で好印象だった。
・若い方々がたくさん参加しているということ、運営にも携わっていること、参加者も多いことも含めて活気を感じた。夕食、昼食も含めこんな安価な参加費で･･･と驚いてしまった。
・たくさんの団体の中で、異年齢間の交流、色々な職業・立場の方々との情報交換などができてよかった。
・自分にあった内容のプログラムが体験できていい。
・アンケートのとり方など考えさせられた。
・講演内容も大変参考になったが、事業運営管理そのものがとても勉強になった。
・少々時間に追われ過ぎてしまった感があった。もう少し中身を絞り込み、腰を落ち付けてやるプログラムがあってもよいのでは？
・座席がせまかった。前後左右にゆとりがほしい。
・宿泊施設が付設されているともっとよかった。
・休憩の時間が少ないと感じた。

野外活動指導者のためのリスクマネジメントセミナー２００８

発行年月日：２００９年３月２０日

社団法人　日本キャンプ協会
〒151-0052 渋谷区代々木神園町 3-1　国立青少年センター内
Tel.03-3469-0217　　Fax.03-3469-0504

財団法人　関西テレビ青少年育成事業団
〒530-0056 大阪市北区兎我野町 7-1　KTV エイトビル４階
Tel.06-6315-2591　　Fax.06-6315-2592

２００８年安全なキャンプのための標語

☆ 一般の部・最優秀作品 ☆

『キャンプには持っていかない慣れ・油断』

★ 少年少女の部・最優秀作品 ★

『楽しさを裏で支えるキャンプの手』

日本キャンプ協会安全管理委員会では、毎年「安全なキャンプのための標語」を募集しています。皆さんの活動にも安全標語を活用して「キャンプの安全」を意識してみませんか？